

清末小説から 140

2021.1.1

林訳の改編者表記——瀬戸博士の嘘と捏造……………樽本照雄 1

莎士比原著『盗花』について……………荒井由美28

『紅涙影』の原作(誤解の系譜3)……………樽本照雄34

清末小説から45

★本年もよろしくお願ひいたします。近く『清末民初小説目録 第13版』を公開する予定です

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

林訳の改編者表記

——瀬戸博士の嘘と捏造

樽本照雄

清末民初の翻訳事情——改編者の扱い

清朝末期民国初期の翻訳状況について基礎的な説明をする。本稿では改編者表記を主として取り上げて述べる。林訳を含んだ多数の漢訳においてそれが当時どのように扱われていたか。それが理解できるはずだ。関連して厳復の手紙にも触れる。

本稿でいう改編はやや広く考えている。戯曲を小説形式に書き換えればそれが改編だ。シェイクスピア戯劇(莎劇)を小説化したラム姉弟、クイラー=クーチ(Q)、あるいはイブセン戯劇を小説に書き改めたドレイコット・M・デルが改編(第1翻訳)者に該当する。

書き換えるという行為は翻訳と重なる部分がある。ロシア語原作であればそれを英訳した人は第1翻訳者であると同時に改編者だ。

清末民初のばあい英語、フランス語、日本語の原作が翻訳された。それらに直接もとづいた漢訳は第1翻訳だ。

そのほかに日本語を経由する翻訳作品がある。本稿ではその日本語に翻訳した人を改編(第1翻訳)者だと考える。第1翻訳が直訳ではなく翻案であれば改編の度合がより強くなる。中間に他言語をはさむばあいは漢語重訳が第2翻訳である。

たとえばロシア語原作のばあい図式化すれば次のようになる。ロシア語→英語(あるいは日

本語：第1翻訳)→漢語(第2翻訳)という経路だ。英語翻訳あるいは日訳が第1翻訳と同時に改編である。それにもとづいた重訳(第2翻訳)が漢訳作品となる。わざわざ日本語(第1翻訳)を経由して漢語(第2翻訳)にするのは時代背景のある独特な事情による。日本語に翻訳されたものを利用するのが便利だったというだけ。

原作とは別の改編(第1翻訳)者を漢訳公表時にどのように扱っているのかが問題になる。作品名と翻訳者名を明記するのか書かないのか。

基本をいえば清末民初翻訳小説のすべてに原作、原作者、改編者が明記されているわけではない。さすがに漢訳者は署名する。しかしそれ以外はなにも書かない作品が多い。一見して創作か翻訳か不明だ。そこを指して不十分だと批判することは意味がない。現在の常識で当時を考へては判断を誤る。批判するより前に不明部分を解明する方が重要である。研究の基本であることはいうまでもないだろう。

包天笑の例をあげる。

包天笑は共訳者がいるばあい原作者のハガード、ドイルなどを書いたこともある。ただしそれすら明記しないこともあって一定しない。そもそも原作者、改編者を記載しなければならないと包天笑は考えていないらしい。

彼が単独で漢訳した作品についても扱いは違った。包天笑が手掛けたユゴー、ヴェルヌ、チエホフ、マロなどの翻訳は基本が日本語にもとづいている。しかし底本が日本人の手になるとは書かなかった(別表参照)。研究者が原作とは別に底本を特定する時に苦勞をする理由だ。

翻訳であるにもかかわらず原作者も改編(日本語重訳)者も記述しない。そういう例をひとつ示す。

笑「(科学小説)空中戦争未来記」(『月月小説』第2年第9期1908)がある。包天笑は訳とは書いていない。底本は日本の破天荒生「空中戦争未来記」*1だ。包天笑は改編した日本人名を差しおいた。

包天笑は作品によっては登場する日本そのものを自分の漢訳から締め出すこともあった。愛国心を懸命に發揮していたと思われる。日本語にたよっている事実を隠蔽した。ただし1970年代の回憶録では認めている。

改編者を示さない例が多い。包天笑、陳景韓、呉禱、母我、魯迅、周作人、劉半農、胡適などの翻訳を一部分だけ「表1：改編者不記一覧」にする。ほんの参考例だ。調査により改編者が判明している。それを不記にしている作品のみである。

表1：改編者不記一覧 ()内黄色は不記を表わす

	漢訳題名	原作者	改作者不記	漢訳者	雑誌 出版社	刊 年
1	俄国情史	俄・普希金	(高須治助)	戢翼翬	開明書店	1903
2	秘密使者	法・迦爾威尼	(森田思軒)	天笑生	小説林社	1904
3	無名之英雄	法・迦爾威尼	(森田思軒)	天笑生	小説林社	1904-05
4	侠女奴		(FORSTER)	萍雲女士 [周作人]	『女子世界』8-12 期	1904.8.11-?
5	侠奴血	法・聶俄	(森田思軒)	天笑生	小説林社	1905
6	造人術	(STRONG)	(原抱一庵主人)	笑	『時報』	1906.5.20
7	造人術	米・路易斯託崙	(原抱一庵主人)	索子[魯迅]	『女子世界』 2年4・5期	刊年不記 [1906]
8	鉄窗紅涙記	法・聶俄	(森田思軒)	天笑生	『月月小説』1年1 号-2年6期	1906.11.1- 1908.7
9	新蝶夢	意・波侖	(MARIE CORELLI 黒岩涙香)	冷	有正書局	1906

10	銀鈕碑	俄・葉門忒甫	(嵯峨の家主人)	吳 禱	商務印書館	1907
11	虚無党之一夜	(CONAN DOYLE)	(原抱一庵)	笑	『時報』	1908.4.22-5.6
12	古王宮	(BERTHA M. CLAY)	(黒岩涙香)	天笑生	『月月小説』2年10、12期	1908
13	匈奴奇士録	匈牙利・育珂摩耳	(BICKNELL)	周遠[周作人]	商務印書館	1908
14	棠花怨	法・雷科	(黒岩涙香)	冷	中国図書公司	1908
15	俄帝彼得	俄・蒲軒根	(昇曙夢)	冷	『小説時報』1期	1909.10.14
16	六号室	俄・奇霍夫	(瀬沼夏葉)	天笑生	『小説時報』4期	1910.4.10
17	心	俄・痕苔	(上田敏)	冷	『小説時報』6期	1910.8.5
18	碧海情波記	(JULES VERNE)	(森田思軒)	天笑	上海・秋星社	1910
19	秘密党魁	法・迦爾威尼	(森田思軒)	天笑生	『小説時報』7-10期	1910.11.2-1911.6.11
20	神槍手	俄・蒲軒根	(ALLINSON)	母我、冷	『小説時報』13期	1911.10.6
21	空谷蘭	(BERTHA M. CLAY)	(黒岩涙香)	包天笑	有正書局	(1912.1)
22	苦児流浪記	法・愛克脱麦羅	(菊池幽芳)	天 笑	『(商務)教育雑誌』4巻4号-6巻12号	1912.7.10-1914.12.15
23	棺材匠	俄・蒲軒根	(ALLINSON)	母 我	『小説時報』17期	1912.12.1
24	炭画	波蘭・頸克微支	(CURTIN)	周作人	文明書局	1914.4
25	默然	(ANDREIYEFF)	(JOHN COURNOS)	半 儂 [劉半農]	『中華小説界』1年10期	1914.10.1
26	最後一課	法・都德	(REYNOLDS)	胡適	『短篇小説』亜東図書館	1919.10

上の表1を見てひとついうことができる。清末民初の翻訳において原作者は別として改編者(第1翻訳者)を省略する傾向がある。

プーシキンの3作品を3人が漢訳した。しかし底本と漢訳者の組み合わせが異なる。陳景韓は日本語ができたから単独で漢訳した時は昇曙夢の日記を底本とした。母我と共訳したばあいはアリンスン英訳だ。また母我の単独漢訳もアリンスン英訳であるという具合である。3作品ともに改編者である昇曙夢とアリンスンの名前を出していない。記録する必要を感じなかった。

包天笑の『空谷蘭』は日本涙香経由の漢訳で原作はバーサ・M・クレイ作品である。そのクレイと黒岩涙香の名前が明記されていないが読者は気にしない。作品自体を読んで楽しみ、演劇化、映画化されたものを見て満足する。

陳景韓訳『新蝶夢』はマリー・コレリ原著、涙香日記を底本としている。しかしそれを書かない。しかも大幅に縮刷した奇妙な翻案本だ。

後述する文学革命派の人の手になる漢訳も見てみる。

魯迅の漢訳「造人術」は「米国路易斯託崙」とある。「米国」と表示しているところから日本語訳本を底本にしたことがわかる。漢語では「美国」と書くのが普通だからだ。しかし魯迅はそれが原抱一庵主人であることを書かない。

周作人漢訳『匈奴奇士録』の原作者は「匈牙利育珂摩耳」だ。ハンガリーのヨーカイ・モールである。底本は英訳本だった。しかし周作人はそれを翻訳本に書き記していない。おまけに彼自身がベイン(NISBET BAIN)英訳だと間違ったことを別の文章で記述したから誤解が長く続いた。正しくはビクネル(PERCY FAVOR BICKNELL)英訳本だ。

劉半農漢訳「默然」には原作者も英訳者も記載がない。底本は LEONIDAS ANDREIYEFF 著、JOHN COURNOS 訳“SILENCE”(PHILADELPHIA: BROWN BROTHERS,

1908)である*2。なぜアンドレーエフもジョン・クルノスも記述しないのか。英訳の前半を省略し多くの加筆を施しているから翻訳とは考えなかったのか。それにしても底本があるから創作ではない。いうならばかなり重度の翻案である。原作者も改編者も隠蔽した。その劉半農が林訳に改編者のラム名がないことを握って批判非難するのだからわからないものだ。

ドーデ原作を胡適が漢訳して「最後一課」である。こちらは少し手が込んでいる。フランス語から直接漢訳しているとしか見えないように工夫した。しかし胡適が底本にしたのはレイノルズ(REYNOLDS)英訳本だった。改編者を隠す理由があったのだ。

記述のない底本、原作を探索して研究者が困惑するだけである。だからといって当時の批評家研究者が原作者、改編者が書かれていないと立腹し指摘し非難し攻撃した例は見ない。困惑するのと糾弾するのは異なる。改編者を記載しない作品が多く普通のことだった。問題になった唯一例は林訳である。

林紘のばあい

林紘には英語、フランス語のできる協力者が複数いた。林紘は共訳者の名前を必ず並記している。共訳者を改編者だと考えれば林訳はそれを明記したことになる。

林訳には共訳者ではない改編(第1翻訳)者が存在する作品がある。

たとえば徳富健次郎『不如帰』だ。塩谷栄の英訳本を底本にしたと書いている。塩谷栄が改編者である。

『俄宮秘史』は関係者の手記を魁特(WILLIAM TUFNELL LE QUEUX)が編集英訳したものだ。それを底本にしたから彼の名前を示す。ただし著者と考えれば不思議ではない。

英国伊門斯賓塞爾原著、麦里郝斯編輯、林紘筆述、曾宗鞏口訳『荒唐言』(『東方雜誌』第5年第7-9期(光緒三十四年七月二十五日-九月二十五日(1908.8.21-10.19))がある。

原作はエドモンド・スペンサー(EDMUND SPENSER, 1552?-99)『妖精の女王 FAERIE QUEENE』(1590-未完)だ。それをソフィア・H・マクルホーズ(SOPHIA H. MACLEHOSE)が改編した。さらにそれを底本にして漢訳したのである。ここではそのマクルホーズを明らかにしている。

ただシュゴ、バルザック、トルストイ、セルヴァンテスなどは英語にもとづいているはずだが英訳者(改編者)名は記述していない。底本はいまだに不明のままである。

それ以外で改編者が判明しているがそれを記載しない林訳を表2にする。

表2: 林紘のばあい

	漢訳題名	原作者	改編者不記	漢訳者	雑誌出版社	刊年
1	伊索寓言	(AESOP)	(TOWNSEND)	林 紘、 魏 易	商務印書館	1903
2	英国詩人吟辺燕語	英・莎士比	(CHARLES LAMB, MARY LAMB)	林 紘、 魏 易	商務印書館	1904
3	欧史遺聞・羅馬克野 司伝 24	英・莎士比亞	(QUILLER-COUCH)	林 紘、 陳家麟	『上海亜細亜 報』	1915.9.10- 10.3
4	雷差得紀	英・莎士比	(QUILLER-COUCH)	林 紘、 陳家麟	『小説月報』7 卷1号	[1916.1.25]
5	亨利第四紀	英・莎士比	(QUILLER-COUCH)	林 紘、 陳家麟	『小説月報』7 卷2-4号	[1916.2.25]- 4.25
6	亨利第六遺事	英・莎士比	(QUILLER-COUCH)	林 紘、 陳家麟	商務印書館	1916.4

7	凱徹遺事	英・莎士比	(QUILLER-COUCH)	林 紆、 陳家麟	『小説月報』7 卷5-7号	1916.5.25- 7.25
8	林妖	英・曹西爾	(CHARLES COWDEN CLARKE)	林 紆、 陳家麟	『小説月報』8 卷3号	1917.3.25
9	梅孽	徳 ⁷⁷ ・伊ト森	(DRAYCOT M. DELL)	林 紆、 毛文鍾	商務印書館	1921.11
1 0	亨利第五紀	英・莎士比	(QUILLER-COUCH)	林琴南	『小説世界』 12卷9-10期	1925.11.27- 12.4

『イソップ』の改編者はタウンゼンドである。しかしそれを書かないといって林紆が批判されたことはない。中国学界では『イソップ』『アラビアン・ナイト』などの英訳仏訳版本を研究対象にした人はつい最近までほとんど存在しなかった。

莎氏、チョーサー^{*3}、イブセンなどは改編者を示さない。形は違っても原作者にほかならないという認識だ。すべての林訳に改編者名が記載されていると考えれば誤る。

ご注意ください。莎氏といっているが林紆が漢訳したのはラム、Qの小説化本だ。イブセンであればデルの小説改編本であることも共通する。林紆は外国戯曲をそのまま漢訳したことはない。林紆本人も莎劇を漢訳したとはどこにも書いていないのだ。しかも戯曲と小説は区別している。これが重要である。

研究者批評家で林訳を問題視した人は1918年までひとりとしていなかった。標的にされたのは『吟辺燕語』（1904）だ。莎士比（シェイクスピア）著としている。だが底本のラム名を記載していない。そこを驚ぶかみにした人たちがいた。

大問題になったのは1918年である。提起し

たのは北京大学の教授たちだった。該書刊行の14年後のことだ。もしそれがもともと大きな問題であるならば刊行直後に指摘があっただろう。なぜ14年間という時間差が生じたのか。奇妙なことだった。

文明戯のばあい

莎氏つながりで説明する。文明戯のいくつかは莎氏原作だといっている。しかし実は林訳ラムの『吟辺燕語』から改編された。その林訳題名は日本語に訳せば『シェイクスピア戯曲物語』にほかならない。ラム名がないからといって莎氏がそれを書いたと考えればその人の知識のなさが暴露される。知識問題でなければ別の意図をもっていた（阿英のこと）。

文明戯が宣伝する莎劇は林訳にもとづき台詞を創作したものだ。実際の公演時には新聞広告で莎氏原作であることを強調してうたい文句にした。ラムの名前などどこを探しても見えない。「莎劇もどき」という^{*4}。

林訳『吟辺燕語』収録の20作品は文明戯として舞台にのぼったという。その一部を新聞の公演広告から抜き出す。

表3：文明戯のばあい

漢訳題名	原作者	改編者不記	『申報』 広告
獄 配	莎士比亞	(ラム、林紆、魏易)	1916.1.20
医 譜	莎士比亞	(ラム、林紆、魏易)	1916.1.20
假面具	莎士比亞	(ラム、林紆、魏易)	1916.3.17
冤 縁	莎士比亞	(ラム、林紆、魏易)	1916.3.21
竊国賊	莎士比亞	(ラム、林紆、魏易)	1916.4.27
殺 澁	莎士比亞	(ラム、林紆、魏易)	1916.4.30

ラムの名前は表面に出てこない。あくまでも莎氏が大書される。だいいち当時は莎劇原書から漢訳されたものは存在しなかった。文明戯関係者にとって莎氏というならばラムでも違いはなかったということだ。

中国で最初に英語原文から漢訳したのは1921年の田漢『ハムレット』（1922年出版）である。それ以前には『ハムレット』といっても林訳ラム本によって知る読者がほとんどだったという状況だ。その『ハムレット』が文明戯「竊国賊」になった。だが原作者が莎氏であると強調はしてもラムの名前を隠す。ラムの小説をさらに改編して莎氏の戯曲として宣伝した。それこそ「戯曲と小説の区別がつかない」状態だ。しかしながらラム名がないといって文明戯を糾弾する人は演劇研究の専門家でも（瀬戸博士含めて）現在までひとりも存在しない。

林訳『英国詩人吟辺燕語』はラム姉弟『シェイクスピア物語』を底本にしている。だから漢

訳題名も直訳だ。そもそも莎氏作『莎氏物語』がある方と考える方がおかしい。普通はラム名を脳内で補うだろう。その事実が当時の中国知識人なら誰でも知っていた。大学生だった呉宓ですらラム本だと日記に書くくらいだ。ましてや北京大学の教授たちがそれを知らないはずがない。普通にいって清末民初においても知識人の多くは林訳ラム本によって莎劇を知ったのだった。

『吟辺燕語』がラム本の漢訳だというのは当時から常識となっている。わざと表立って指摘すればその人は非常識である。『吟辺燕語』刊行後にラム名がないと提起する知識人がいなかった原因だろう。

明治時代の莎氏とラム

日本でも同じようなことがあった。明治時代においては莎氏といいながら内実はラムである例を普通に見ることができる*5。

表4：日本のばあい

日訳題名	原作者	改編者不記	日訳者	出版社	刊年
仏国某州領主麻吉侯情話	セキスピア	(ラム)	翠嵐先生 鳴鶴藤田茂吉	春夢楼	1883.7 ⁶
人肉質入裁判	英国西基斯比耶 シェキスピーヤー	(ラム)	井上 勤	今古堂	1883.10 ⁷
花間の一夢	撒斯比亞 セキスピア	(ラム)	九阜山史 鳴鶴藤田茂吉	『郵便報知新聞』	1884.12 ⁸
幽 霊	英国西基斯比耶 セキスピア	(ラム)	井上 勤	鶴仙堂、永昌堂	1888.11.16 ⁹

柳田泉は莎氏の翻訳を紹介して「シェイクスピアの原作によったものとラムの『物語』によったものとある」（172頁）と書く。戯劇と小説を区別することに重点をおかない。莎氏原作という点では同じだという考えなのだ。

林紓批判の基本構造——清末民初翻訳界の常識、

文学革命派の非常識

包天笑らの漢訳、林訳、文明戯、日本の莎氏翻訳状況を紹介した。外国作品を翻訳して公表

するとき中間に存在する改編者を無視する事例がいくつもある。清末民初の翻訳について知る人はその事実が多数あることを認識している。原作者、改編者がいつもそのまま記述されていると考えるのは正しくない。記載がないのが普通だといってもいいだろう。そう把握する方が現実に即している。だからこそ研究者であれば探求心を燃やす。改編者が未知のままの翻訳作品が今でも手つかずで大量に残っているからだ。

同時代の知識人ほとんどは改編者度外視の状

況に慣れ親しんでいた。不満を表明する、あるいは批判をした人は誰もいないのがその証拠だ。唯一の例外が錢玄同、劉半農、胡適ら北京大学教授たちの集団であった。のちに鄭振鐸と阿英を加えた文学革命派が中国学界の主流を占める。

清末民初には改編者を明記しないばかりも多いという翻訳状況を再度見てほしい。林訳以外にもあまたの該当例がある。その事実を踏まえるとひとつの疑問が自然に発生する。多量の類似作品があるにもかかわらず林訳だけが攻撃されたのか。それらの中の選りにもよって『吟辺燕語』である理由は何か。多数の類似例をまとめて論難するならばまだ理解できる。しかし林訳のみなのだ。どう考えても奇怪である。

文学革命派が林訳『吟辺燕語』を特に選んで批判の標的にした根拠はなにか。ほかの訳者の別の作品ではだめだったのだ。これこそが林訳批判における核心的問題である。

背後には文学革命派の思惑があっただろう。文学革命派が誰よりも老大家林紓その人を必要とした事由を考える。

文学革命派は「文学革命」「古文の廃止、白話の採用」を主張した。しかし反応はまったくなかった。反対者が出てこないことに困惑する。魯迅は当時を回想して次のように書いている。「彼らはちょうど『新青年』を発行していた。しかし、その時は誰も賛成してくれないばかりか反対するものもない。だから彼らはたぶん寂しさ〔寂寞〕を感じていたのだろう、と私は思った」*10

「彼ら」とは陳独秀ら文学革命派を指す。「寂しさ」を感じた彼らはぼんやりと時間を過ごしたわけではない。極めて積極的な行動に出た。自分たちで主敵を探し出し指名することにした。その人が備えているべき非難のための条件は、白話不使用、改変(第1翻訳)者不記、直訳不採用などになる。これが出発点だ。

敵(復)林(紓)と並び称されていた敵復は対象になっていない。ましてや林紓より若い包

天笑、陳景韓など眼中になかった。自分たちの敵としては資格が十分ではないという判断だっただろう。文明戯では分野が異なる。かといって魯迅と周作人の周氏兄弟は同志だから候補にあがるはずがない。劉半農といえど当事者そのものだ。当然最初から埒外に位置づけられる。

その結果自分たちを抑圧する敵として北京在住の林紓だけが残る。選り抜いて任命したといってもいい。そうとしか考えられない。林紓批判という結論が先に下されたのだ。この結論先行が彼らの常態だ。

林訳小説と普通に称せられるほど古文による翻訳が特別に多い。ほとんどが上海の商務印書館から刊行された。「説部叢書」に収録された漢訳は抜き出されて別の「林訳小説叢書」100種にまとめられるくらいに読者の人気を博した。詩文で知られ小説、戯曲を書き、絵画もよくする当時の高名な老文人である。中華民国になってからも意識としては清朝に使える旧臣をもって任じた(遺老)。1918年当時数えて六十七歳だ。古文を擁護しその重要性を述べたことがある(1917)。古文を廃止することはよろしくないと言明した文章にすぎない。

文学革命派はその林紓に目をつけて守旧派保守派の代表者というレッテルを貼りつけた。結果として老人ひとりを北京大学を中心とした若者集団が無理矢理引きずり出して指弾非難したかっこうだ。言論による集団暴行である。

林紓を標的にして攻撃することを先に設定した。批判の拠り所をあとから探して提出したのは刊行から14年も経過している林訳『吟辺燕語』である。莎氏を持ち出すならば時期的に見てもっと身近な莎氏原作の別訳があった。上の表で示したQ(クイラー=クーチ)本だ。だが彼らは根拠として採用しなかった。なぜなら民国初期の読者にとって清朝末期に刊行された『吟辺燕語』の方がはるかに名高く広く知られていたからだ。「説部叢書」に収録された後「林訳小説叢書」「小本小説」でも読むことができる

というくらい普及していた。誰でも知っている作品を掲げて糾弾難詰すればその衝撃度はより大きい。劉半農らはそこを狙っている。

もうひとつの漢訳ラム本『海外奇譚』(1903)は知名度からいえば『吟辺燕語』に比較してかなり低い。しかも訳者不明では批判の対象になりようがない。

またそれまですでにラム本の注釈本が刊行されている。拉穆著、甘永龍注釈『原文/莎氏樂府本事/附漢文釈義』(商務印書館 庚戌(1910)年五月初版/民国四年九月二十日七版/民国七年十月十二版/民国九年十六版/民国十九年九月二十九版)*11だ。題名を訳せばこちらもそのまま『シェイクスピア[莎氏] 戯劇[樂府] 物語[本事]』である。その重版数を見ればどれだけ多くの読者に歓迎されたかわかる。知識人の多くが『吟辺燕語』と同時に注釈付き英語原文を読んでいた可能性もあるだろう。それくらい有名な作品だ。

以上のとおり『吟辺燕語』にラム名がなくとも底本はラム本であることは周知の事実だった。それが知識人の常識である。

その常識をかいくぐり林訳を攻撃するためには工夫がいる。小芝居が必要だと錢玄同と劉半農は考えたようだ。日本留学帰りの王敬軒(錢玄同)が林紓を「現代の文豪[当代文豪]」と絶賛して『吟辺燕語』を例のひとつに示す。それに対して劉半農は打ち合わせ通りに用意していた攻撃を加える(なれあいの芝居[双簧戯])。

錢玄同と劉半農はその『吟辺燕語』にラム名がない個所だけを捉えた。それを唯一の理由にして決めつけた。すなわち林紓は「豆と麦の区別もつかない[不辨菽麥]」である。その意味するところは莎劇から直接漢訳して小説体に改編したという。戯曲と小説の区別がつかないと論難した。ここが虚偽である。

林訳の底本はラム本であるのは常識だ。小説体になっているものを小説体で訳すのはわかりき

っている。しかしそれでは林紓を批判する理由にならない。批判を強行するための突破口は莎氏の名前表記部分にしか存在しなかった。それを口実に林紓は戯曲を小説にかえて翻訳したと無理やり攻撃した。最初から成立はむづかしい立論だ。ところがこれができるからおかしなことである。

錢玄同と劉半農はラム本を指して莎劇そのものだと嘘をついた。「豆と麦の区別もつかない[不辨菽麥]」と決めつけた言葉がそのまま劉半農に戻ってくる。すなわち「区別がつかない」のは劉半農たちの方になるからだ。この「戯曲を小説にかえて翻訳した」と「戯曲と小説の区別がつかない論」はそのまま批判の根拠として定着した。虚妄の説明が学界に広く認知された。事実をいえば林訳はラム本を漢訳したのだ。しかし過去において研究者の誰ひとりとしてそれを提起したことはない。異様というべきだ。

錢玄同と劉半農はラム本であることを当然知っている。それを知らぬ顔をして莎氏原作と記述した部分を前面に押し出し高くかかげた。同時代の知識人はこれを見てあきれたのではなかろうか。まさかコナン・ドイル、ル・キュー、ツルゲーネフ、トルストイなどの翻訳を多数手がけたことのある北京大学教授の劉半農が常識を持たないとは思わないだろう。なにか裏事情があると考えたか。

誰も賛否の意思表示をしていない。その直後にこれも北京大学教授の胡適が飛び出してきて劉半農を援護した。「林琴南把 **Shakespear** 的戯曲訳成了記叙体的古文! 這真是 **Shakespear** 的大罪人」(1918)と叫んだ。林琴南は莎氏の戯曲を記述体の古文に翻訳した! 莎氏にとっての大罪人だ。

過去においてなんども指摘している。胡適が示す莎氏の綴りは **Shakespear** だ。普通の綴りよりも末尾に「e」が不足している。アメリカ留学帰りの胡適が書き間違えうわけがない。胡適は莎氏の名前をそう表記するラム本を知って

いた。ゆえにそう綴ったとわかる。胡適はラム本を見ながら莎劇そのものだと偽って林紓を罵った。

その後、胡適は『短篇小説』第一集(亜東図書館1919)を刊行した。以前に漢訳していたドーデ原作の「最後一課」を収録している。その時も基づいた英訳本は徹底して隠蔽した。いかにもフランス語から直接漢訳したように装った。林訳批判をしておいて胡適自らが林紓と同じく改編(英訳)本を使用したとは言いたくなかったからだ。

『吟辺燕語』がラム本を底本にしていることを銭玄同、劉半農、胡適の北京大学教授たちは熟知していた。知りながら知らぬふりをした。ラム名不記の1点にしがみついで確信をもって林紓を批判したのだ。当時の翻訳界における常識を度外視している。もともと詐欺同然だから非常識だという。だが彼らはそれを顧みず敢えて実行した。どうしても林紓を非難批判する必要があった。文学革命派は該作品を踏み台にして文芸上の問題ではなく政治運動化した。そのための証拠として不可欠だった。これは尋常ではない事態である。

劉半農は自分が漢訳した「黙然」についてはすっかり忘れてしまったらしい。あるいはそう偽装した。原作者のアンドレーエフも底本にした英訳(改編)者のジョン・クルノスも書かずに黙殺していたのだ。その行為は林訳と同じである。その劉半農が改編者を明記しない林訳を攻撃した。そのまま自身が返ってくることを考えていなかったようだ。林紓を刺したつもりの切っ先は劉半農自身をそのまま貫いた。そればかりか同志の周氏兄弟、胡適をもなぎ倒している。それほど危険な行為であることの認識が欠けている。それが銭玄同と劉半農のかかえる大きな問題だ。

当時『吟辺燕語』に関して林紓を支持守護した知識人はまったく表面に出てこなかった。皆無であったことも記録しておくべきだろう。そ

れが異様であると指摘されなかったことを意味する。内部にいれば異常という意識がもともと発生しないとわかる。異常が正常日常である情況に身を置けばそうなる。ただし外部にいれば気づく可能性があるかもしれない。ただしそういう人はいなかったが。

嚴復の見解と立場

林紓が文学革命派から攻撃されている事実について知識人は十分に知っていた。そもそもの対立点は言語問題だ。林紓は古文(文言)を捨てるのはよくないという。文学革命派は白話の採用を要求した。しかし彼らが直接非難しあうわけではない。文学革命派が一方向的に林紓を攻撃するだけだ。彼ら以外は誰も発言しない。

林紓は古文の維持存続を望んだ。これは文学革命派以外の知識人に共通した認識だっただろう。表に引きずり出された林紓は文学革命派に煽られるようにして1919年3月に北京大學校長蔡元培あての書簡を公表したことがある。林紓は以前京師大學堂(後の北京大學)で教えていた。その北京大學において古文と孔孟の教えが廃止されているという噂がたった。林紓は心配して質問した。大學教育の基礎となる古文と孔孟の教えは現在もきちんと行なわれているか。と。校長の蔡元培は継承実行していると回答した。それだけのことだ。林紓が蔡元培に嘯みついたり批判をしたとか蔡元培が一蹴したとかいう内容ではない。

俯瞰して客観的に見れば白話を主張する陳独秀、胡適らが古文を静かに擁護する林紓を一方的に批判攻撃している。その対立について多くの知識人は傍観したまま沈黙していた。

表立って出たはこない嚴復の心の内を述べた手紙がある(嚴復死後に『学衡』第20期1923.8掲載、単行本『嚴幾道与熊純如書札節録』1924。初出未見)。彼が林紓をとりまく情況についてどう考えていたかを見ておく。

漢訳『天演論』で知られる嚴復が私信で文言

と白話について考えを述べている。1919年7月24日付の熊純如あて手紙*12だ。

北京大学陳、胡諸教員主張文白合一、在京久已聞之、彼之為此、意謂西國然也。不知西國為此、乃以語言合之文字、而彼則反是、以文字合之語言。(中略)

北京大学の陳(独秀)、胡(適)らの教員が文言と白話の合一を主張していることは北京において久しく聞いています。彼らがそうするのは西洋でそうだからといたいらしい。西洋で言語を文字に合致させているとは知りません。しかし彼らはその逆で文字を言語に一致させるものです。(中略)

名前を出された陳独秀は「文学革命論」(1917)において国民文学、写実文学、社会文学を建設せよと主張した。また胡適は「文学改良芻議」(1917)、「建設的文学革命論」(1918)において古文を廃止し白話を採用するように古文で執筆して要求した。白話の使用による言文一致というならば嚴復の書いている「文白合一」でも同じになる。

設用白話、則高者不過《水滸》、《紅樓》；下者將同戲曲中簧皮之脚本。就令以此教育、易于普及、而翰棄周鼎、宝此康匏、正無如退化何耳。須知此事、全屬天演、革命時代、學說万千、然而施之人間、優者自存、劣者自敗、雖千陳独秀、万胡適、錢玄同、豈能劫持其柄、則亦如春鳥秋虫、聽其自鳴自止可耳。林琴南輩与之較論、亦可笑也。

もし白話を用いるならば、よくて『水滸伝』『紅樓夢』にすぎず、くだらないのは戯曲の京劇脚本と同じです。それで教育せよというなら普及はしやすいでしょう。しかし国の宝を捨て空のフクベを大事にするようなものです。まさに退化とどこが違う

というのでしょうか。次のことを知らなくてはなりません。すべては進化(天演)です。革命時代に学説は万千とありますがそれを社会に実施して優者が生き残り劣者は廃れる。千の陳独秀、万の胡適、錢玄同がいるとしてもどうしてやり方を強制できるのでしょうか。春の鳥、秋の虫のように自らが鳴いて自らがやめるのに従うのみ。林琴南が彼らとやりあっているのも笑止千万です。

嚴復は古文を支持していた。しかし彼が翻訳した進化論に従い優勝劣敗説を言語に適用する。自然の成り行きに任せる。だから林紓(琴南)のように古文が重要だという主張をもって対応をしていること自体に批判的だ。嚴復が笑ったそのままだが現実になっている。林紓の示した反応は陳独秀によって都合のいいように利用された。非難と嘲笑の材料にしかならなかった。

当時の嚴復は体調不良であった*13。それを割り引いても彼の文学革命派に対する冷ややかな態度を見れば当時の一般的な知識人の立場をうかがうことができる。大枠でいえば傍観静観だ。

文学革命派は林紓『吟辺燕語』にラム名がないという細かい部分を握った。そこから嘘を構築し林紓を批判した。虚偽にもとづいた時点で説得力皆無だ。しかし当時それが通用したし現在も基本的にそのままだというのも中国学界の現実である。その頃の翻訳界にある常識を黙殺している。賛同する人は文学革命派の仲間だけ。だから文学革命派と支持者たちの異常さが一層の強さをもって浮かびあがってくる。

瀬戸博士は嘘をつき語句を捏造する

林紓のばあいは中国近代翻訳史上まれに見る冤罪事件である。林紓が濡れ衣を着せられたという基本事実がある。これを視野に入れない論文はそれ自体が成立しない。

それを無視して中国学界の非常識を継承して

いるのが日本の瀬戸博士だ(以下敬称略。博士は敬称ではない)。21世紀になった現在も林紵有罪説を固執し発言を続けている。その根拠は相も変わらずラム名の不記だ。「林紵が『吟辺燕語』の底本を記さなかったのも、ラムが『シェイクスピア物語』を書いたのは単なるシェイクスピア作品の圧縮にすぎず、両者の間には本質的な相違はないと考えたからであろう」(『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29. 94頁)と述べるところに集約されている。「戯曲と小説の区別がつかない」林紵は批判されて当然という意味である。

原著『中国のシェイクスピア』に触れておく。序章に「中国のシェイクスピア受容史」を置き第1-8章、附章で構成される。そのうち第2章全部が「林紵のシェイクスピア観」だ。その章題を見れば林紵が莎氏という詩人(劇作家)をどのように考えていたかを主題にしていると思う。しかし内容は林紵が「戯曲と小説の区別がつかない」と断定するに止まる。林紵の莎氏観などどこにも書かれていないのだ。芸術作品の種類分けを問題にしておりここには莎氏そのもの姿が存在しない。言ってみれば林紵の文芸観だ。肩すかしという。瀬戸博士の認識は基本のところからズレている。

商务印书馆版《吟边燕语》的文化意义

——再论林紵的莎士比亚观

(日) 瀬戸宏

【摘要】林紵、魏易译《吟边燕语》是商务印书馆1904年出版的书籍，是“说部丛书”的一部。《吟边燕语》是兰姆姊弟《莎士比亚故事集》的全本翻译，曾在中国莎士比亚接受史上发挥了重要的作用，中国人实际上是通过《吟边燕语》第一次了解了莎士比亚作品的具体内容。《吟边燕语》对中国的莎士比亚演出史也有很大影响。当然，《吟边燕语》有很大问题：写明“莎士比亚”，却没提兰姆的名字。笔者认为这不是偶然，而是跟林紵的莎士比亚观有密切关系。因此本文通过分析《吟边燕语》序文，研究林紵的莎士比亚观，并重新探讨《吟边燕语》的文化意义。

【关键词】林紵 《吟边燕语》 莎士比亚

DOI:10.19325/j.cnki.10-1176/g2.2019.04.007

一、《吟边燕语》的基本内容

林紵、魏易译《吟边燕语》是商务印书馆1904年出版的书籍，后来被收入了商务印书馆《说部丛书》。《吟边燕语》是兰姆姊弟《莎士比亚故事集》的全本翻译，曾在中国莎士比亚接受史上发挥了重要的作用，中国人实际上是通过《吟边燕语》第一次了解了莎士比亚作品的具体内容。《吟边燕语》对中国的莎士比亚演出史也有很大影响。当然，《吟边燕语》有很大问题：写明“莎士比亚”，却没提兰姆的名字。笔者认为这不是偶然，而是跟林紵的莎士比亚观有密切关系。因此本文通过分析《吟边燕语》序文，研究林紵的莎士比亚观，并重新探讨《吟边燕语》的文化意义。

瀬戸博士の最近の論文を紹介する(以下の一部分は2020.7.26付清末小説研究会ウェブサイト

トで公開した)。

瀬戸宏「商務印書館版《吟辺燕語》的文化意義——再論林紵的莎士比亞觀」(『中国出版史研究』2019年第4期 2019.12)である。この漢語論文は瀬戸博士『中国のシェイクスピア』の林紵部分と同内容だ。圧縮して漢語に直しただけ。瀬戸博士は林紵有罪を定めてそれに合う理屈を捏ねあげる。このやり方を実行している。林紵批判をするために瀬戸博士が嘘をつき語句を偽造していることを先に言っておく(後ろの「指摘9」を参照)。

さて前述のとおり「戯曲と小説の区別がつかない」という定型文がある。林紵を罵る際に研究者が使用する伝統の典型的文章だ。しかし林紵に適用すれば虚偽である。文学革命派ほかであれば当てはまる例が見える。

清末民初の翻訳界では改編者の名前を省略する傾向があることを述べた。瀬戸博士はこの常識を持たない。ゆえにラム名不記の箇所にとらわれて思考が停止したままだ。そこから林紵批判にどうつなげていくかだけを考える。研究者としての常識が欠けた視野狭窄状態で立論するからいびつなものが出てくる。しかも林紵を非難した文学革命派との事実関係を把握していない。1918年に林紵を攻撃した劉半農らを絶対的に支持する。瀬戸博士の思考はその時代に引きこもったままである。

「写明“莎士比亚”，却没提蘭姆的名字[「シェイクスピア著」と書いてラムの名前を記さなかった]」のは林紵の莎氏観と密接な関係がある(66頁)そうだ。では林紵の莎氏観とはなにか。

「林紵認為 *Tales from Shakespeare* 是莎士比亞詩體文學壓縮成的文學作品，劇本和小説都是語言藝術，沒有本質上的區別。所以出版《吟邊燕語》時省略了蘭姆的名字，也沒有提《吟邊燕語》的底本是 *Tales from Shakespeare*。換句話說，林紵其實不明白劇本和小説的本質區別」(68頁)。

ここを見れば一挙に1世紀以前の1918年に逆戻りしていることがわかる。劉半農が林訳を批判した時に使用した用語もよみがえっている。「豆と麦の区別もつかない[不辨菽麥]」すなわち「戯曲と小説の区別がつかない」である。それは林紓の文芸観をいうだけであって莎氏観ではないと重ねて言う。

しかも林紓は「序」の中で莎劇(莎氏之詩。合計3ヵ所)とラム本(莎士比筆記、莎詩之記事、莎詩紀事)の区別をはっきりさせているのが事実だ(後述)。以前からそう指摘している。しかし瀬戸博士はそれを度外視し虚偽を撒き散らし続ける。

瀬戸博士がいう林紓の莎氏観とは結局のところ「戯曲と小説の区別がつかない」に尽きる。ただそれだけ。筋違いだ。莎氏観とはなんの関係もない。加えて林紓についてはそれが偽りだからたちが悪い。

新しい資料も新しい視点もない。林訳のラム名不記あるいは「序」だけを持ち出して「林紓其不明白劇本和小説の本質区別」(68頁)と従来どおりの古くカビの生えた見解をくり返す。それが成立しないと最初からはっきりと指摘している。だが瀬戸博士は聞く耳を持たない。林序では莎劇とラム本を区別していると具体的な語彙を示して筆者は面と向かって発言したこともある(後述)。瀬戸博士はそれに答えなかった。瀬戸博士の持論に差し障るからだ。「論争」にはなりえない。今回の漢語論文でも破綻している論旨を取り出して反復している。

瀬戸博士の意見は以前から次の3問題から外れない。同じようにこちらも返すだけ。

瀬戸博士の3問題ほか

1 論点ずらし——

林紓批判の出発点かつ根本は「戯曲を小説にかえて翻訳した」であった。しかし真相はラム本を漢訳したものだ。さらにQとデルの英文小説がある。小説を漢訳して小説になるのは当然

だ。非難の根拠が存在しない。虚偽にもとづく批判は成り立たない。林訳の底本に英文小説があるという事実は認めるほかないと瀬戸博士は理解したようだ。そこで論点をすり替える。ラム名、Q名不記の箇所を握って放さない。結局のところ次のようにいいたいらしい。林紓は文学革命派を騙すためにラム、Qの名前を故意に隠蔽した。つまり林紓に責任を転嫁して彼を詐欺師に認定したわけだ。林紓を攻撃するためだけに思いついたとわかる。恣意的であって証拠はない。

以上に該当するのが漢語論文の次の箇所だ(下線は筆者。以下同じ)。

「這些歷史劇体裁也都跟《吟邊燕語》一樣属于小説体，只注明“英国莎士比原著”，所以後人產生了誤會，認為林紓把劇本改訳成小説体」(67頁)。「筆者則認為引起誤會的重要原因是在林紓只注明莎士比原著，但没有写出翻譯依據的底本。所以，引起誤會的原因也在林紓本人，并不一定是冤枉」(67頁)。「但林紓没提底本作者名字(蘭姆和奎勒·庫奇)，所以產生誤會，這方面的責任在于林紓」(69頁)。

底本の改編者名を出さなかったことが原因で誤解を生じさせたとかくまでも力説する。当時において類似例は多かった。なぜ林紓だけが批判されるのかと問い考える発想が瀬戸博士には根本からない。

その直前に不可解なことを書いている。「蘭姆的《莎士比故事集》很著名，本不可能發生誤會[ラムの『シェイクスピア戯劇物語』は著名だったからもとから誤解が発生するはずはなかった]」(67頁)と記述する。

瀬戸博士の説明によれば『吟邊燕語』はラムの名前がなくてもラム本の漢訳だと全員が理解していた。ならば劉半農による攻撃は発生するはずがないではないか。瀬戸博士が書いている、ラムとQの名前を出さなかったから誤解が生じた(林紓没提底本作者名字(蘭姆和奎勒·庫奇)，所以產生誤會)と矛盾する。論理的一貫

性を保つことには無関心だ。

ラム本は周知のことであるから明記していなくても誰も誤解しない。全員が底本について了解していたから林紓批判は無理筋である。発生のしようがなかった。そう述べて文学革命派の異常な行動を非難するのであればまだわかる。

ところが瀬戸博士の言い分たつを結ぶと奇妙なことになる。もう一度いう。「ラムの『シェイクスピア戯劇物語』は著名だったからもとから誤解が発生するはずはなかった」が「林紓は底本の作者名(ラムとクイラー=クーチ)を出さなかったから誤解が生じた」。これは矛盾そのものだ。しかも林紓批判が発動された経過を閑却している。瀬戸博士はこれが成立すると考えている。意味が不明だ。説明と論理が一貫していないからア然とする。その場その場で言いつくろうから結果が支離滅裂になる。「研究者」としていかなものかと思う理由だ。

もうひとつ。「誤解が発生するはずはなかった」と明記した。ならば劉半農らが承知したうえで林紓攻撃を強行したと認めるのだろうか。それもない。あくまでも林紓に責任があると断言している。焦点を林紓に当てたまま周囲の状況を見ようとはしない。林紓の方から仕掛けたように書く。印象操作だ。ゆえにそれは事実ではないと筆者は反論している。

実際はこうだ。錢玄同と劉半農は林訳『吟辺燕語』がラム本であることを十分に認識している。ほとんどの知識人もそれを理解している。しかし錢劉らは林訳にラム名がないところだけをつかんで知らぬ顔で攻撃をした。莎劇を小説に変えて漢訳した、「豆と麦の区別もつかない」である。瀬戸博士のいう「誤解が発生するはずはなかった」はずのところを鉄面皮にも糾弾した。ラム本であることを知りながら莎劇を漢訳したと嘘をついて攻撃した。問題は林紓ではなく錢玄同と劉半農らの方にある。虚偽を根拠にして林紓攻撃を実行しているからだ。

瀬戸博士は一貫して文学革命派側の視点に立

つ。この視野の狭さが瀬戸博士を誤らせている。

清末民初にあった翻訳の実状を知らない人の発言である。林紓は学術的に有罪であるという結論を先に下す。後から理由をこじつけた。まさに文学革命派が行なったことをなぞっている。

2 被害者になりすます——

瀬戸博士が以前から使用している表記は「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」だ。これが瀬戸博士の「嘘」だ。林紓はラム、Qの英文作品を莎劇だと偽ったという意味であるらしい。それに該当するのが次だ。「但是林紓把不是莎士比亚的的东西説成了莎士比亚的翻译，这依然是事实」(69頁)

林紓が詐欺を働いたと一方的に責任を押しつけている。文学革命派から攻撃されて被害者であった林紓は立場が逆転して加害者になる。それと同時に文学革命派と瀬戸博士は当然のように被害者になりすますことになった。被害者であれば何を言ってもいいし何をしても許されると考えている。これが瀬戸博士による文章の偽造につながる。

しかし事実は違う。林序を読めば林紓がラムと莎劇を区別しているのが明らかだ。林紓はラム本を「シェイクスピア作品(=莎劇)」だと説明したことはない。重要な箇所だ。ラム名を表示しなかっただけ。実際はまったくの逆である。ラム、Qの改編作品を莎劇そのものだと言い立てて攻撃したのは文学革命派の方だった。もともと虚妄の上に成立している林紓攻撃なのだ。そこを瀬戸博士は認めようとしなない。

3 二重基準を採用——

林訳『吟辺燕語』に対してはラム名がないことを根拠にして瀬戸博士は激しく攻撃する。一方で歴史的事実として存在するのが林訳にもとづいて創作した文明劇の「莎劇もどき」だ。新聞に上演広告を出したとき莎氏を大書してラムを言わない。林紓に対して実行した以上の非難が必要とされる箇所である。しかし「中国現代

文学演劇研究の末席に連なっている」(『中国のシェイクスピア』317頁) 瀬戸博士はこれについて紹介はするが批判はしない。つぎの箇所がそうだ。

「二十世紀初至一十年代中国還沒有完整的莎士比亚作品翻譯，只有辛亥革命前後很流行的文明戲(中国早期話劇)把《吟辺燕語》改編成舞台劇演出，雖然文明戲的莎劇演出跟莎士比亚作品相去甚遠」(66頁)

文明戲が莎劇よりも遠く離れる原因は『吟辺燕語』を使用したからだ。ここでラム本を隠蔽していることを指摘しないし非難もしない。瀬戸博士の論理によればラム名を掲げない文明戲については林訳と同等以上に批判しなければならないはずだ。だが演劇研究の専門家である瀬戸博士はそうはしない。

「台詞是莎士比亚作品的生命。這是為甚麼沒有翻譯台詞的“翻譯”不能算作莎士比亚作品翻譯的理由」(69頁)。

莎劇の生命は台詞だと瀬戸博士は述べる。よく見てほしい。林紓が使用した底本はラムとQの小説本だ。莎劇を直接漢訳していないから莎劇の台詞とは関係がない。

台詞を重視するのであれば瀬戸博士のセリフこそ文明戲に適用すべきである。莎劇の台詞をまったく翻訳していないのが文明戲なのだ。それにもかかわらず莎劇だと大書して新聞で広告をした。台詞が莎劇の生命ならば林訳にもとづいて勝手に台詞を創作した文明戲は強い非難の対象になるのは当然だろう。瀬戸博士はなぜそれをしないのか。

文明戲が莎氏を強調してラムを隠した事実を瀬戸博士は説明せず糾弾もしない。典型的な二重基準である。

「林紓を詐欺師に認定し林紓の名誉を毀損する瀬戸博士」は今もなお健在だ。ラム名がないことだけを掲げて林紓は冤罪ではなく有罪だ(「并不一定是冤枉」67頁)と決めつける。ならば改編者を明記しない例として示した劉半農、

周氏兄弟、胡適、包天笑、陳景韓らも批判すべきだろう。林紓のみを攻撃する理由を解説するのは「研究者」としての責務ではないのか。

瀬戸博士は林紓が無実の罪を負わされている事実を否定する。冤罪事件であるという認識が皆無だ。根拠もなく林紓の有罪を断言する。驚くことに林紓を詐欺師にしてしまった。中国の研究者でさえやらなかったことだ。無罪の林紓に対して有罪を宣言し糾弾しつづける。何度もいう。これを踏まえて筆者は瀬戸博士のことを「研究者としてすでに死亡している」と言っている。瀬戸博士は日本に生き残る文学革命派のひとりである。

過去の中国学界に事大するためには自爆も辞さない。ところが皮肉なことに中国学界は林紓についての評価を改変している。だがその情報を受信できていないから追従にもなっていない。日本における中国現代文学演劇研究専門家のひとりの実態がこうである。すでに破綻している立論を反復してどうしようというのか。痛々しくてつい読んでしまう。

林紓評価に関する商務印書館の姿勢

中国学界の非常識であるという理由は次のとおり。林紓が中国近代文芸に対して大きく広く貢献したのは事実だ。特に林訳小説の多数大量ぶりからそれがわかる。ところが従来は林紓に無実の罪を着せて貢献については無視をしていた。そのこと自体が誤りだ。不自然不思議で不合理な状況がこれまで続いていたといわざるをえない。

現在、商務印書館は林紓の汚名を返上し名誉を回復する方向で編集出版方針を明確にしている。筆者はそう見る。

過去において商務印書館は林訳のほとんどを刊行した。既述のように「説部叢書」とは別に「林訳小説叢書」を特に設けて100種を収録する。ほかには「小本小説」「欧美名家小説」などもある。雑誌『東方雑誌』『小説月報』『小

『説世界』ほかに翻訳を連載した。林訳が商務印書館の経済的基礎を確立するのに大きく寄与したのは周知のことだ。商務印書館創立者たちと親しい関係にあった林紘だった。

張稷「在大時代中涵養社会思潮、孵化社会力量——從“林紘現象”看商務印書館的使命与文化」（『中華読書報』2016.11.2 電字版）がある。百年前の商務印書館は林紘に対して時代に応じた最適の待遇をしたと張稷は述べる。現在は百年を回顧しながら林紘を再評価する。その文化的価値があるから当然だという主旨で書かれたものだ。歴史的事実を冷静に見据えて書かれた優秀な文章だと考える。

商務印書館による刊行の実際をいえば「文化大革命」以後の1981年より林紘関連書籍を徐々に増加させている。『林訳小説叢書』10冊および錢鍾書等『林紘的翻譯』1981、夏曉虹＋包立民編注『林紘家書』2016、吳仁華主編『革新与守固——林紘國際學術研討會論文集』2017、『天演論・茶花女遺事 壹百貳拾年紀念特藏』2017、(日)樽本照雄著＋李艷麗訳『林紘冤案事件簿』2018、あるいは張治編『林訳小説精選十種』2020（張治は『解説』本において林訳を高く評価し従来とは一線を画する）などがある（網羅はしていない。以下同じ）。

商務印書館が樽本『林紘冤案事件簿』を漢訳刊行したことが公然たる変化だと思う。それまでの林紘有罪説を全面的に否定した論文集だ。林紘の冤罪を晴らした。2018年の刊行になったのは上級の許可を待っていたからだろう。その間に中国学界における林紘評価の基準が訂正されたことを示している（ついでにいう。商務印書館と日本金港堂の合併について事実を公表することは中国ではいまだに解禁されていない。学術研究よりも政治判断が優先しているからだ）。

商務印書館以外の出版社から出た関連書物を少し示す。『中国近代文学大系』11集27巻翻譯文学集二1991、李家驥ら編『林紘翻譯小説未刊九種』1994、また大型出版の『林紘訳著

經典』全4冊2013、『林紘訳文全集』全47冊2018、江中柱ら編『林紘集』全10冊2020、金明編『中華翻譯家代表性訳文庫・林紘巻』2020などをあげておく。いうまでもなく薛綏之＋張俊才『林紘研究資料』1983/2010、陳錦谷『林紘研究資料選編』上下2008などは周知の研究書だ。

そのほかにも林紘関連書籍は刊行されているが多すぎるので省略する。これらを見れば現代中国の出版界では再評価の潮流がすでに形成されていると考えていい。

中国学界の上級は林紘が冤罪であったことを公式に認めて謝罪し告知をするだろうか。ありそうもない。しかしそれがわかるように具体的な行動で示すだろう。過去に非難してきた人物の名誉を回復するにも手順がある。筆者の見聞をもとにして以下に述べる。

中国では歴史的人物であろうと批判されたというだけでその後裔関係者たちは社会的政治的に圧迫される。いやおうなく彼らの現実生活に侵食してくる。これが中国の現実だ。日本にはこの実情は把握しにくい。中国文学の学術研究のつもりが中国人の実生活に関係していると知らされれば普通の研究者は驚く。聡明であれば発言する時は慎重になるだろう。

中国で評価が修正されるとなんらかの「平反（名誉回復）」が行なわれる。口頭伝達から大会開催などの規模が異なるのは各個人に対する上級の判断だと感じる。文学関係の著名人物では学術研究会（学会）の形をとる。上級はまず国内で学会を開催しそこへ子孫親類たちを招く。実質は平反大会である。個人に対して従来実行していた社会的政治的圧迫は今後は行なわないとの意思表示だ。あるいは外国人を参加させる国際学会を開いて世界に伝達する。

林紘ほどの有名人になれば平反の規模は相当大きいと推測する。順序としてはまず関係刊行物の出版を許可する。各種刊行物を増加させながら様子を眺める。最終的に学会を開催して知

らしめるという方法がとられたと考える。

学会については林紆ゆかりの福建で2014年に福建工程学院主催「林紆国際学術研討会」が開催されたのが早い。これには研究者のほかにも林紆の子孫が出席している。平反大会だろう。2016年には商務印書館主催の「林紆書画展暨林紆与近現代中国文化転型学術研討会」がある。林紆再評価という目的をもって組織されたものだ。その学会の模様を紹介する商務印書館ウェブサイトには「重新評価林紆〔林紆を再評価する〕」と表記される。写真を見ればこちらにも林紆の後裔複数人を招待している。1918年から数えて約1世紀という時間がかかった。その長さだけ林紆は強く批判され続けた。その後裔関係者たちはそれだけ苦難の時間を過ごしたという意味だ。

瀬戸博士が参加したのは2017年の「商務印書館与中国現代文化的興起」だという。商務印書館創設120年を記念する。同時に商務印書館と関係の深かった林紆を顕彰することも目的のひとつだと推測する。日本から参加した瀬戸博士の報告文の題名に「商務印書館版《吟辺燕語》」が見える。まさにその版元だ。しかも林紆について「再論」するという。創設記念を寿ぐ会場で林紆「再論」を披露する。商務印書館の関係者は瀬戸博士が林紆の冤罪を晴らしてくれると見込んだのではなかろうか。

ところが瀬戸博士はそういう背景と主催者の意図には無頓着だった。1世紀以上前の林紆批判思考を引きずりながら中国学界の過去の非常識を再現してみせた。内容は変わらないが表現を強めた林紆批判の漢語論文を報告した。

なによりも瀬戸博士の立論そのものが基本から破綻している。しかも現在の編集方針とはまったく合致しない古色蒼然とした内容である。商務印書館の張稷もこれには困惑しただろうと容易に了解できる。張稷はすでに林紆冤罪事件について認識していたはずだ。

久しぶりにそれも外国人による直接の林紆批

判が再来した。報告を聞いた参加者も驚いたと想像する。林紆の名誉を回復すべき場所であるにもかかわらず大昔からの林紆批判を蒸し返して発表したからだ。1世紀前のミイラ同様のものがまさか現代によみがえるとは予想もしない。瀬戸博士は発表後に「面白い、良かった、と言ってくれた人が何人もいた...」(2017.8.14)とつぶやく。嫌味を言われたとは思わないらしい。会議に参加した新聞記者董牧杭は瀬戸博士の報告を記事にした(『澎湃新聞』ウェブサイト2017.8.16。題名は後述)。のちに瀬戸博士の論文は商務印書館ではなく中華書局系の雑誌に掲載された。

漢語論文に「附記」がある。2017年に北京で口頭発表した該文が『中国出版史研究』に掲載された事情を説明している。「商務印書館張稷女士(論文集主編)」の紹介があったと述べる。ここで個人名を掲げることは剣呑であるとは思わないのか。なぜなら張稷が瀬戸博士の論文主旨に賛成し林紆の有罪を認めている、と誤解される恐れがあるからだ。瀬戸博士は林紆の人権を侵害して平気な人物にほかならない。張稷がそれと同類だと決めつけられる可能性もある。商務印書館内部で張稷が問いただされるような事態が発生したらどうするのか。

瀬戸博士にはあるべき常識がない。商務印書館社員の個人名を中国で出すことには注意が必要だとは思わなかったのかといぶかる。瀬戸博士の論文が原因で張稷に迷惑がかからないように願っている。

瀬戸博士漢語論文の間違ひ(上)

漢語論文にある誤りを掲げてページ順に解説する。

▲指摘1——65頁 『吟辺燕語』が1904年に出版され「後来被收入了商務印書館出版的“説部叢書”中」と説明する。

←確認が必要だ。「説部叢書」収録前の『吟辺燕語』初版を実物で示してほしい。筆者が何

を要求しているか理解しない恐れがあるので確認のために述べる。「説部叢書」ではない『吟辺燕語』初版の「実物」を提示しなければならない。再版本は不可である。ましてや目録の記載では話にならない。あくまでも「初版の実物」を要求する。それがあってはじめて「後に「説部叢書」に収録された」ということができる。

▲指摘2——65頁 注①に「樽本照雄《清末小説目録》」とある。

←誤り。樽本は『清末小説目録』を編纂したことはない。『清末民初小説目録』各版ならある。正確な記述を心がけるべきだ。

▲指摘3——66頁 『澥外奇譚』から引用して「定名曰 Tale From Shakespeare」と書く。

←不注意かついい加減である。該書が示す莎氏の綴りをきちんと書き写していない。該書「叙例」の原文は「Shakspere」であって「e」と「a」を欠いている(後掲写真を参照)。そう記載しているラム本を底本にしたからだ。引用文はあるがまますべきなのは常識だろう。該当部分は『澥外奇譚』の訳者が無知だと非難する証拠に利用されている(後述)。非難する方が間違っている。それを防ぐために注釈をつけなければならない箇所だ。

▲指摘4——66-67頁 瀬戸博士は自著『中国のシェイクスピア』について「日本学術界的評価基本上很好, 出現了幾篇高度評價該書的書評」と書く。

←厚顔さにあきれる。自著に対する書評が発表されたくらいは述べるだろう。しかし高く評価されたと自画自賛するのを見せつけられるとは思わなかった。ものの本によると漢語の「高度評價」は中国大陸で使用する官僚用語だそう。 「賞賛」という意味。しかし「賞賛」を使うとそれで決定してしまい身動きがとれなくなる。政治的風向きが変わったばあいを考えてどのようにも弁解ができるように官僚が自己保全のために使う特殊な表現だという。瀬戸博士が中国大陸の官僚気取りだとは知らなかった。

それにしても嘘で固めた林紓非難部分も高く評価(賞賛)されたと読者を誤誘導している。こういう問題のすり替えは身についた荒唐技術なのだろう。日本語を知らない中国人が相手ならこれくらい書かないと有効ではないと瀬戸博士は判断したようだ。傲慢であって「研究者」としてどこか感覚が異なると感じる。

書評は3本が挙げられている。樽本が書いた書評「中国のシェイクスピア最新成果」(『清末小説から』第122号 2016)は意図的に省いた。「高度評価」ではないからだ。なるほど。

書評「高度評価」の中身

林訳部分について日本学術界ではどのような賞賛があるのだろうか。見てみる。評者の肩書きは筆者が補った。

①陳凌虹(華東師範大学副教授)「書評: 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』」『比較文学』第59巻 2017.3.31 電字版

日本語書評の関連部分を引用する。文中に示した「注」は筆者がつけた。説明するために番号をふる。

「第二章は「清末小説研究家・樽本照雄氏との論争の産物^{注1}」(三一六頁)として、翻訳家林紓のシェイクスピア認識にまつわって書かれた。林紓自身が外国語に通じないため、翻訳は助手^{注2}の口述した内容を流麗な中国語古文に敷衍するのである。『吟辺燕語』の影響力が大きかったが、問題は林紓がラム『シェイクスピア物語』という翻訳の底本を明記せず^{注3}、「莎士比亞^{注4}」原著とのみ記している。つまり林紓は「シェイクスピアはまず詩としてその作品を書き、のちにそれが劇界の上演台本となったと認識し^{注5}」、「シェイクスピアの作品ではないものをシェイクスピア作品として翻訳したのも事実^{注6}」で、鄭振鐸などの新文化運動の代表人物が「林紓はおそらく戯曲と小説の区別があまり理解できていなかった^{注7}」(一〇七頁)と評価したことは決して「冤罪」では

ないと著者は主張する^{注8} 164-165頁

瀬戸博士の著作に書いてある文章をほぼ書き写して配置しただけ。誤植の指摘以外に陳凌虹独自の見解はほとんどない。著作の記述に全面的に依存している。反論しないから瀬戸博士と考えを同じくしているとわかる。陳凌虹の林紓部分は残念ながら書評にはなっていない。なにしろ林紓有罪説を支持している。重大な誤りである。

注について説明する。

注1 「論争の産物」というのは間違いだ。瀬戸博士が書いた妄語をそのまま信じている。

注2 「助手」という言葉に軽蔑感がただよう。林紓が外国語を知らず助手の口述翻訳を古文でつづったという。ここで使用しているのは手垢のついた中国学界の伝統的な常套句だ。負の評価を表現している。つまり助手に振りまわされたでたらめな翻訳であることを示唆して貶める。見下して「助手」と書いている。

だが事実は違う。林紓にもとから助手はいない。いたのは共訳者だ。共訳者は林紓の名前と同等に必ず表示される。『吟辺燕語』の林序ではわざわざ共訳者魏易(魏君春叔)を登場させるほどに気を配っている。林紓が共訳者を大事にしていることが明白だ。陳凌虹はその事実を知らないようだ。わざわざ「助手」という単語を用いて林紓を侮蔑している。その考えは中国学界に存在する従来の林紓批判を継承するものだ。林紓について自分で調べたことがないのだろう。実物で確認されることをお勧めする。

注3 「ラム『シェイクスピア物語』という翻訳の底本を明記せず」は不正確だ。ラム名はたしかに書いてはいない。しかし林序において莎劇とラム『シェイクスピア物語』は区別している。ここは重要な箇所だ。自分で林序を見て確認したほうがよい。

注4 「『莎士比亞』原著」と書くのは誤り。「莎士比原著」が正しい。林紓は基本的に「莎士比」と記述した。現在の表記とは異なる。陳

凌虹は『吟辺燕語』などの林訳そのものを見ていないらしい。実物を手に取る必要がある。

注5 「シェイクスピアはまず詩としてその作品を書き」と引用する(瀬戸博士本の71頁)。陳凌虹はこの箇所に注をつけず自分の意見も述べていない(参考:(日)瀬戸宏著+陳凌虹訳『莎士比亞在中国:中国人的莎士比亞接受史』広州・広東人民出版社2017.1。61頁)。陳凌虹が瀬戸博士と同様に林序原文を把握していないことが判明する。「詩として」関連部分は瀬戸博士の記述を写した。だが林序にそういう語句は存在しない。瀬戸博士が「捏造」(ここのカッコは強調の意)した。このことを指摘しなければならなかった。その説明が間違っていることに気づいていないという意味でもある(本稿後ろの「指摘9」)。自分で林序を確認することが望ましい。

中国人研究者が林紓の原文をそのまま引用するのは普通のことだ。しかしそれを現代漢語で解釈した論文を読んだことがない(英語論文は除く)。だから古文で書かれた林紓の原文を正しく解釈しているのかどうかはわからなかった。かねがね疑問に思っていたことだ。陳凌虹はそれに回答した。林序にある「詩」について瀬戸博士と同じく思い違いしている。林序に出てくる「詩」(正確には「莎氏之詩」)の意味を知らないのだ。中国人だからといって林紓の古文を正確に把握しているとは限らない。その事例を目の当たりにしてそうだろうと思うだけ。

注6 林紓はラム、Qの小説化本を漢訳した。だが「シェイクスピア作品として翻訳した」と書いたことはない。事実を把握してほしい。

注7 鄭振鐸を出すならば説明しなければならないことがある。彼が林紓を批判し「戯曲と小説の区別があまり理解できていなかった」と決めつけたその根拠だ。鄭振鐸はQの小説化本を知らなかったからだと明記する必要があった。知らなかったといって林紓に冤罪を押し付けた責任はなくなる。

注8 林紓は「決して「冤罪」ではないと著者は主張する」と無邪気に書き写して疑問にも思わない。異をとらえていないから陳凌虹は瀬戸博士と同見解だ。陳凌虹も林紓が有罪だと考えている。樽本『林紓冤罪事件簿』(2008)を読んでいないようだ。あるいは読んではいらぬが認めないという意味か。そうでなくとも瀬戸博士に反対しない時点で陳凌虹は瀬戸博士と同様に中国学界の非常識な伝統である林紓批判を受け継ぐひとりである。林紓の人権を侵害してなんとも思わない。これは研究者として決定的な間違いであると知ったほうがよい。

林紓部分について陳凌虹は紹介に終始している。反対していなければ瀬戸博士にとっては「高度評価」となるらしい。

ひとつ付け加える。「『竊国賊』の初演は一九一六年四月二十八日であると『申報』で確認できる」(166頁)。その事実は樽本も指摘している。しかし陳凌虹の方が時間的に先行していることを後で知った。ただし瀬戸博士が示した同年五月七日の広告に瀬戸博士の意図的な削除があることを書くべきだった。そこが不足している。瀬戸博士著書の漢訳者だからそれを期待するのは無理かもしれない。

陳凌虹は日本語の著作『日中演劇交流の諸相——中国近代演劇の成立』(思文閣出版2014.8.20)を刊行している。文明戯を扱ってはいるが林訳莎氏については言及がない。詳細を知らないようだ。瀬戸博士の文章を引用するだけで反対も評論もせず終わるのも無理はない。瀬戸博士の林紓批判をどのように紹介するか、それがそのまま陳凌虹自身の学術的評価に結びつく。その認識を持っていないのが残念だ。

②河合祥一郎(東京大学教授)「書評:瀬戸宏『中国のシェイクスピア』」『中国研究月報』第71巻第3号 2017.3.25

林紓批判について次のように書いている。「第二章「林紓のシェイクスピア観」では、中国のシェイクスピア受容の礎を作った林紓にま

つわる議論に一石を投じる。即ち、ラムの『シェイクスピア物語』を林紓が訳した『吟辺燕語』は大きな影響力をもったのだが、そこに収められていなかった歴史劇も林紓が『シェイクスピア物語』と同様に小説体にして紹介したため、林紓は戯曲を小説体に改めて訳したという通説が生まれた。これは近年の研究によって、林紓が戯曲を小説体に改めたわけではなく、林紓はクイラー・クーチが小説体書き直した『シェイクスピア歴史物語集』を翻訳したのだとわかったが、本書は「林紓はおそらく戯曲と小説の区別があまり理解できていなかった」という従来の批判は訂正する必要がないとしている」47頁

瀬戸博士の説明をつまんで紹介しているだけ。反対せず疑問も注釈も加えないで引用をした。ここに林紓冤罪事件は見えない。河合は瀬戸博士の非常識な説明に同意している。「従来の批判」が誤っているとは考えない。ここが間違いだ。

「林紓にまつわる議論に一石を投じる」と書いている。河合は林紓冤罪事件について何も知らないことがわかる。

最初に議論を引き起こしたのは瀬戸博士ではない。林紓は約90年にわたって中国学界から学術的に有罪の烙印をおされてきた。それを否定し無実を証明したのが樽本「林訳シェイクスピア冤罪事件——林紓を罵る快樂 番外編」2007(のち『林紓冤罪事件簿』2008)である。Q本という証拠を示して林紓の無罪を証明した。だが瀬戸博士は頑なに林紓の冤罪を認めない。中国学界伝統の有罪説を維持し露骨に林紓の人権を侵害し続けているのが瀬戸博士である。瀬戸博士が他人のやってきた従来の林紓批判をくり返していることを「一石を投じる」と表現するのは適切ではない。

河合の説明文で不可解なのは引用した部分の論理が破綻していることに言及しないことである。

林紓は小説体に書き直されたQ本を漢訳した。だから「戯曲を小説体に改めて訳したという通説」は間違っていた。通説が間違っているのであれば林紓批判は訂正する必要がある。これが普通の論理だ。

ところが河合は瀬戸博士の見解である「従来
の批判は訂正する必要がないとしている」と結びつけた。そこに疑問も意見も提示していない。通説は間違っているがそれによって生じた「批判は訂正する必要がない」というのでは矛盾する。矛盾ではないというなら説明が必要だ。それをしていない。

注目するのは従来からある林紓批判を河合も支持していることである。批判が誤りだと書いていないからそうなる。林紓冤罪事件が視野から抜け落ちているのが原因だろう。

必要最小限の説明をする(重複する箇所がある)。中国学界では現在でも基本的に政治基準が最優先される。文学革命派から主敵に名指しされた林紓は中国学界では有罪が確定したままだ。証明不要でそうになっている。文学史において林紓は罵倒されるだけ。生きる余地を与えられていない。前述のとおり林紓に対する学術的評価である有罪は関係者の現実社会に影響が及ぶ。過去が現在に直結して不可分である。ここが現代中国社会の特異なところだ。日本社会とは事情が違う。林紓逝去(1924)後であっても「文化大革命(1966-1976)」では後裔親類縁者研究者まで社会的政治的に虐待された。誰も説明しないから日本では理解されにくい実情だ。この現実を知ることが林紓について評論するばあいに重要である。

林紓批判の背後には1918年から現在における負の林紓評価がからみついている。2007年以前の学界では林紓といえば文学史において問答無用で有罪が当たり前だった。

ところが同年に状況が大きく変化した。林紓無罪の証拠が提出されたことを指す。河合が文中で言及しているQ本の存在が指摘されたこと

だ。林紓が戯曲を小説体に改めて漢訳した、と批判するのはもとから虚偽である。しかも林紓は戯曲と小説の区別をつけていた。結局のところ林紓は冤罪であった。いくら強調してもしすぎることはない。

その瞬間から林紓批判を扱えば林紓が無罪か有罪について論者は態度を表明しなければならなくなった。これが林紓批判からほとんど90年後に出現した新しい局面である。

瀬戸博士は林紓有罪を今も頑固に主張している。その見解を支持すれば必然的に評者の河合自身も林紓有罪に加担することになる。日本の研究者が中国知識人林紓の有罪を宣言する。恐ろしいことだ。そうは思わないのだろうか。

2007年以来、日本の賢明な中国文学研究者の大多数は林紓問題について発言していない。事の真相と重大性を理解しているからである。

瀬戸博士だけが例外だ。中国学界は長年にわたって林紓が有罪だと主張しつづけた。瀬戸博士はそれに事大している。過去の中国学界に依存し迎合しているという意味だ。無実の罪を押しつけられた林紓について有罪だと現在でも堂々と宣言している。林紓冤罪事件に言及するばあいはこれが鍵となる。基礎知識である。

河合は自分が林紓有罪に加担したとは思わないだろう。冤罪事件には経過があることを知らないからだ。片方の瀬戸博士だけを読んで書評をした。視野を広く持って事実を知っていればもう少し慎重に扱ったのではないか。

なるほど。事情を理解していなくても自説に反対しない書評が瀬戸博士にとっては「高度評価」ということだ。わかりやすい。

③小菅隼人(慶應義塾大学教授)「書評:瀬戸宏『中国のシェイクスピア』」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』2017年第64号 2017.5.30 電字版

林紓批判について次のように書いている。「この論争に立ち入り、それに判決を下す能力も資格も筆者にはないが、自説を堅持して論文

という形で反論する瀬戸氏の姿勢そのものが、研究者としての責任を正確に果たそうとしていることは明らかである」52頁

「それに判決を下す能力も資格も筆者にはない」日本の研究者だ。専門は「美学・芸術諸学、ヨーロッパ文学（ヨーロッパ語系文学）」（慶應義塾研究者情報データベースより）という。小菅は書評において自分が何を書いているのか理解していないだろう。そう筆者は感じる。なによりも林紓冤罪事件という視点が存在しない。

小菅のいう「自説を堅持して」というのは、瀬戸博士が無実の罪を着せられた林紓を指して有罪だと明言しその自説をまげないことを指す。「反論する瀬戸氏の姿勢そのものが、研究者としての責任を正確に果たそうとしていることは明らかである」部分は、嘘をついている瀬戸博士に小菅は全面的に同意しそれを賞賛するという考えだ。そう書いただけで小菅は林紓冤罪事件に十分関与している。書評そのものが林紓個人の権利に関係していると想像もしない。樽本の文章を読めば出てくるはずのない意見である。こういう敏感な問題であると知っていれば書評の執筆に際して通常はもっと注意深くなるのではないか。準備もなく不用意に発言するから軽く致命傷を受ける。

本人はただ演劇関係書の書評を書いたにすぎないと考えているだろう。重要だからくり返す。他分野（莎劇）の研究者であっても林紓批判に言及すれば林紓の無罪有罪のどちらかを判断し支持することが必然的に求められる。小菅がそういう事情を理解して林紓部分を執筆したとは考えにくい。何も知らずに結果としてよりもよって瀬戸博士に賛同した。自動的に日本の研究者が中国の知識人林紓の有罪を公言することになる。明敏な選択とはいえない。

瀬戸博士が「研究者としての責任を正確に果たそうとしていることは明らかである」と小菅は書く。「研究者としての責任」がどういう文脈で出てきたのか小菅は承知しているのだろう

か。

証拠が提出されている。やってもいないことをやったと林紓は濡れ衣を着せられた。約90年間に研究者全員が根拠もなく林紓は有罪だと決めつけた。あつてはならない冤罪をつくつたのだ。冤罪を押しつけた従来の研究者（瀬戸博士を含む）各自はその責任をどう取るのか、というのが元の設問なのである。物故者は別として普通の研究者ならば誤りを認めて謝罪するか筆を折って発言をひかえるだろう。

瀬戸博士がやっていることはその反対だ。一層強く林紓有罪を叫ぶ。論点をずらし自分は被害者になりすまし二重基準を使用する。語句を偽造してえげつない（後述）。その目的は林紓有罪を掲げて過去の中国学界に事大することだ。そうし続けることが「著者なりの責任の取り方の一端である」（『中国のシェイクスピア』107頁）と言い切っている。林紓の人権を侵害する行為をしながら反省のかけらもない。その時点で瀬戸博士は研究者として不適格だと筆者は判断した。「研究者としてすでに死亡している」と言う理由である。

今回もその非常識な主張を確信犯的に中国で展開した。無罪の証拠があるにもかかわらず林紓有罪説を堅持した。中国で現実に生活している林紓の関係者を再度地獄に突き落とす考えだ。

小菅の説明によれば林紓に濡れ衣を着せ続けることが「責任を正確に果たそうとしていること」になる。これはおぞましい。中国近代文学に詳しくない人の偏って軽率かつ無責任で危険な発言である。事実と事情を知らないところから出てきた無思慮で誤った記述だ。なにも書かないほうがまだよかった。

林紓冤罪事件をたぶん知らない演劇研究の専門家たち3人が上記のように林紓についての外的な文章を発表した。引用紹介されただけで「高度評価」だと瀬戸博士は考える。

瀬戸博士漢語論文の間違い（下）

▲指摘5——67頁 樽本の著作に「《商務印書館研究》(2004)」があると書く。

←正確ではない。『初期商務印書館研究』は2000年だ。2004年のは『初期商務印書館研究(増補版)』である。また『商務印書館研究論集』2006、『商務印書館研究文獻目録』2010、『商務印書館研究論集(増補版)』2016もある。文献の提示は正確にしてもらいたい。

▲指摘6——67頁 大要：瀬戸博士の林紆部分の「原型」は2009年に発表した。樽本と「論争」したがその後樽本は沈黙した。7年後に問題を再提出したという。

←正しくない。樽本は瀬戸博士と「論争」した覚えはない。2008年に関西大学における発表会で瀬戸博士報告を評論したことがあった。樽本「瀬戸宏報告を評する——「林紆のシェイクスピア観——林紆は冤罪か」について」(『清末小説から』第92号 2009.1.1)で公表している。瀬戸博士はそれに言及していない。またその後7年間沈黙したというのだが簡単な理由だ。瀬戸博士が「原型」論文を発表していることを知らなかっただけ。「論争」もなく論文発表を知らず7年が経過した。瀬戸『中国のシェイクスピア』(2016)に関係部分が収録されているのはじめて読んだ。だいたい自分の紀要論文を他人が読むはずだと考える神経に疑問符をつける。7年間も放置せずもう少し早く書物が出ていれば筆者は今と同じ反応を示しただろう。

思い返せば2008年のその発表会だ。たぶんその時すでに瀬戸博士は「原型」論文を準備完了していたと推測する。筆者は不審箇所を指摘し問い質した。瀬戸博士は言いはぐらかし黙ってしまった(後述)。その後7年が経過して著作を読めば筆者が指摘した箇所はすべて閑却している。7年間の時間などないと同じだ。その時はただ「論争」という形を整えたいだけだけの報告会だったとわかる。最初から企んでいたらしい。人からの助言を受け入れる気がないの

だから7年間でどうだというのだろうか。筆者は今から約1世紀以前の漢訳作品についてその底本を探索する作業を続けている。7年間というのはまさに一瞬のことだ。それほど気にすることだろうか。その7年間に瀬戸博士はなにか特別の意味を込めているのか。印象操作をしたらしいが中身は不明だ。

▲指摘7——67頁 瀬戸博士は次のように書いている。「遺憾的は、樽本先生の反駁文章帶有濃厚的個人感情色彩」。

←漢語は理解する。しかし何をいっているのか意味がわからない。「反駁」しなければ同意したと誤解しかねない。だからひとつひとつ丁寧に証拠を示して反論している。瀬戸博士の立論は事実に基づいたものではない。虚偽と捏造をこめているため基本から成立しないのだ。これを指摘してあちこちで説明している。林紆がこうむった汚名を返上し名誉を回復するためにほかならない。

これほど親切に誠実に対応する人はいないと考えるほど筆者自身は「高度評価」である。樽本以外に瀬戸博士の林紆部分を詳細に検討した人がいるのだろうか。寡聞にして知らない。あるとすれば是非読みたいと思う。瀬戸博士の文章を真摯に読んで行なっている学術的「反駁」が「帶有濃厚的個人感情色彩」と感じられるそう。逆の見方をすれば瀬戸博士自身が反論を冷静に読むことができないことを表白している。鏡に映る自分の姿を罵ってどうする。もしかしたら樽本の指摘そのものの全部が「妄言」だといいたいのだろうか。

▲指摘8——67頁。注②に樽本の論文をいくつか掲げる。

←瀬戸博士が読んでいながらもかかわらず露骨に無視した文章がある。特にアマゾン中国に投稿した樽本の漢語書評は瀬戸博士が会議で配布した報告資料に含まれているという(董牧杭の文章)。なおさら削除不可だ。

樽本「【書評】瀬戸宏『中国のシェイクスピア』」

ア』(アマゾン日本) Amazonカスタマーレビュー 2017.3.4。標題は「瀬戸博士「シェイクスピア作品ではないもの」の嘘」。書評は後に削除された。樽本『清末小説三談』清末小説研究会2019.3.1 電子版所収

樽本「【書評】瀬戸宏《莎士比亚在中国》(アマゾン中国)」亜馬遜買家評論 2017.5.8。漢語。表題は「瀬戸博士所說的“不是莎士比亚作品的文章”是谎言」。清末小説研究会ウェブサイト2018.8.28付で再録した。2020.7.29現在、書籍そのものが削除されている。

参考：董牧杭「日本知名学者為何到中国亞馬遜來謾罵同行？」『澎湃新聞』ウェブサイト 2017.8.16。樽本がアマゾン中国で瀬戸博士を非難したワケは単純だ。瀬戸博士が確信的に嘘をつき林紘に無実の罪を着せ続けているからだ。

なお次もある。樽本「自爆する日中の研究者たち3完——清末小説と林訳をめぐって」『清末小説から』第132号 2019.1.1

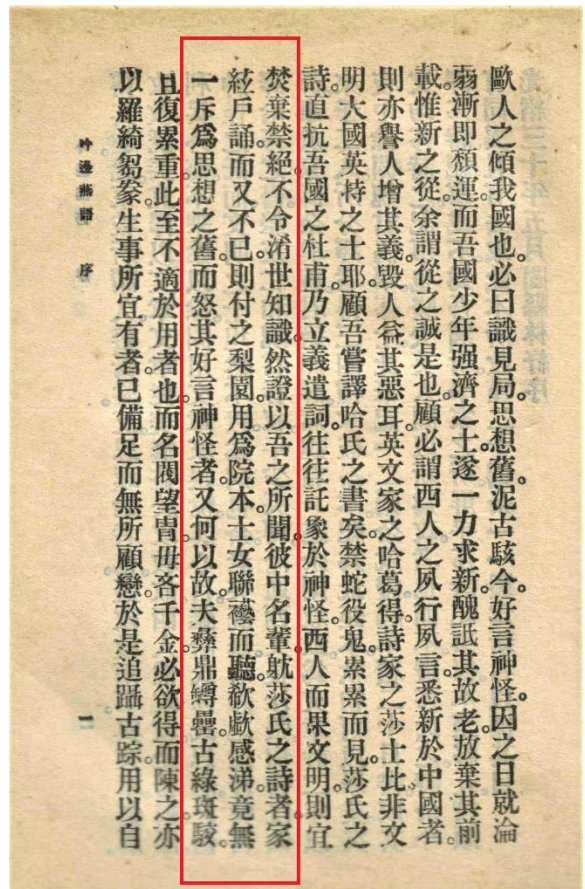
瀬戸博士の捏造と誤解

▲指摘9——68頁。林紘の認識だといって次のように記述する。「林紘認為，莎士比亚的作品首先作為詩在英国很流行，後來有人把莎士比亚的作品交給劇場演出，從此莎士比亚的作品成為劇本[林紘は次のように考えている。シェイクスピアの作品はまず詩としてイギリスで流行した。のちにある人がシェイクスピアの作品を劇場で上演しそこからシェイクスピアの作品は脚本になった]」。「莎士比亚作品的流行過程跟林紘的認識完全相反[シェイクスピア作品の流行過程は林紘の認識とは完全に逆であった]」

瀬戸博士原著の方がわかりやすいから引用する(漢語記述の前半は支離滅裂という意味だ)。「林紘の認識では、シェイクスピア作品はまず詩として書かれ、それが広く愛唱されたため演劇の上演台本として用いられるようになったのである」94頁。「シェイクスピア戯曲の実際の発表、受容過程は、『吟辺燕語』序の認識とは

完全に逆だったのである」95頁。同主旨の文章を別の箇所から。「シェイクスピアはまず詩としてその作品を書き、後にそれが劇界の上演台本となったと認識していたことである。いうまでもなく、実際のシェイクスピア作品発表過程は、林紘の認識とは逆であった」71頁

←本稿では原著の記述を問題にする。漢語論文は原著の劣化複写だからだ。林序にはありもしない「シェイクスピア作品発表過程」を述べている。「詩として」部分の語句をでっち上げた。瀬戸博士は林紘の認識を捏造したのである。ここに瀬戸博士の林紘に対する無知、無理解、誤解と悪意が集中的に表現されている。



林序の該当箇所を示す。

然証以吾之所聞。彼中名輩。耽莎氏之詩者。家絃戶誦。而又不已。則付之梨園。用為院本。士女聯襍而聽。歛歛感涕。

しかし私(林紓)が聞いたところによれば、名士のなかで莎劇をとくに好む者は、どこの家でも誰もが朗誦し、しかもそれで終わらず(書き換えて)劇場にかけける脚本とした。すると紳士淑女は連れだって聞き入り感動して落涙するのだった。

読めばわかる。ここで林紓が述べているのは莎劇についての伝聞だ。しかし瀬戸博士は「林紓のシェイクスピア観が集中的に表現されている」(94頁)と書いて「林紓の認識」にすり替えた。伝聞は伝聞にすぎない。林紓の認識であるわけがない。

林紓が書いているのは莎氏の時代よりも後世のことだ。年月不明である。誰とも知れぬ人が莎劇(「莎氏之詩」←ここが重要)にほれ込んで家庭で朗誦していた。それだけでは終わらず(韻文ではない自分独自の)脚本(これが「院本」)にして劇場にかけた。その上演を見た紳士淑女は感動して落涙したという聞き伝えがある。それを林紓は紹介した。

莎氏の執筆原稿が残っていないのは周知のことだ。イギリスでは時間を経て時代に対応した改作修正をほどこした例があることも普通に知られている。林序を読んでほしい。名前もわからない人のことを話題にした。家庭で朗誦したのだから莎劇の印刷物を入手していることがわかる。莎氏死去後に刊行されたクォート(四つ折り本)、フォリオ(二つ折り本)など、あるいは後の普及版だろうか。悲劇らしいが詳細は不明。わかることは脚本を購入して読むことができた裕福で知的な階級の人だったことだ。莎劇を劇場で直接見ることのできない人々にとって戯曲の刊行本を読むことがその空白を埋める代償行為であったのはいうまでもない。莎劇を好んだそういう人がいて自分で改作翻案した脚本を作り素人芝居を演じた。莎劇に大きな人気があったことを林紓は紹介しているだけ。ここにラム本は出こない。ラム本とはまったく無関

係の事柄だ。あくまでも莎劇を話題にしているから当然である。伝聞を記した該部分に問題が発生する可能性は皆無であるといっていいい。

上に続く林序は「竟無一斥為思想之舊。而怒其好言神怪者。又何以故[考えが古いと排斥し奇怪なことを好んでいうと怒る人が意外にもひとりとしていない。これはなぜなのか]」だ。

イギリス人は莎劇の内容が古く幽霊妖精が登場しようがそれをよしとしている。問題はない。

あくまでもイギリス人が莎劇を好んだという言い伝えを述べていることがわかる。どうして「シェイクスピア作品発表過程」を説明したことになるのか。しかもそれが林紓の「認識」と瀬戸博士は断定する。林序原文から完全に乖離しており奇奇怪怪だ。しかしこれには魂胆があった。

確認しておく。漢語論文では「莎士比亞的作品首先作為詩在英国很流行」である。原著では「シェイクスピア作品はまず詩として書かれ」「シェイクスピアはまず詩としてその作品を書き」に該当する語句だ。これは林序には存在しない。瀬戸博士自身が偽造した。捏造だから原著と漢語論文では表記が揺れる。

シェイクスピアが書いた「詩として」の作品とは何を指しているのか。瀬戸博士が言いたいのは莎劇ではない別物のなにかのようだ。しかし説明がないから結局のところ内容は不詳である。

瀬戸博士には目的があってその語句の前後を創作した。つまり批判するために林紓の認識を偽作したのだ。自作自演という。捏造がどのようになされたのかを筆者が解説する。

瀬戸博士には固定化された立論の方法がある。結論から出発する。林紓は「戯曲と小説の区別がつかない」である。この間違った結論に沿うように林序を強引に解釈する。誤認であろうが気にしない。非難するために字面をながめて語句をあさる。これが文学革命派のやり口だ。

結論部分の「実際のシェイクスピア作品発表

過程は、林紓の認識とは逆であった」をまず設定する。林紓は区別がつかないからラム本から莎劇の台本が作られたと誤解していた——これが瀬戸博士の考える林序のあるべき「正しくない」記述だ。もとが伝聞だし執筆年代から考えても無理筋な発想である。しかし上演台本になるまでの作品発表過程が「逆であった」と主張して非難したい。そのためには前半部分に小説のラム本が配置されなければ論理が成立しない。しかしどこを見てもラム本がない。そこで目をつけたのが林紓の使用している「莎氏之詩」という表記だ。

林序には「莎氏之詩」(合計3カ所)「莎士比筆記」「莎詩之記事」「莎詩紀事」という似ているが微妙に異なる表記がある。林紓は区別ができないから莎劇はラム本だしラム本は莎劇だ、まぜこぜに混同していると瀬戸博士は歪曲した。そこから前出の「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」という事実ではない考えが導き出されている。林紓はラム本(又Q本)を莎劇だと詐称した、を意味する瀬戸博士独自の用語である。虚偽以外のなにものでもない。

瀬戸博士は批判のための必要な語句がそこに不足していると判断した。ないものをためらわずに捏造するのは瀬戸博士にとっては自然の行為だ。「莎氏之詩」から妄想したらしく「シェイクスピア作品はまず詩として書かれ」「シェイクスピアはまず詩としてその作品を書き」などともって回った文章をでっちあげた。莎劇になる前の別物らしい、とくり返す。「詩」の内容がなにを指しているのか説明しない。理解不能である。

「詩として」という不可解な表現を考え出したのが決定的だ。この論理的でない記述が瀬戸博士による捏造を際立たせてしまった。

瀬戸博士にとって林紓のありもしない認識を創作しなければ林紓批判にならない。これが文章捏造の理由である。偽造した時点で学術論文

として破綻している。

事実は次のとおり。林紓はその序において莎劇(莎氏之詩)とラム本(莎士比筆記、莎詩之記事、莎詩紀事)を峻別する。だから区別がつかないというのは虚説だと以前から指摘している。その事実を瀬戸博士は理解しない。というよりも指摘があったあとも無視を決めこんだ。その理由は従来からある中国学界の定説とは異なることがひとつ。もうひとつは林紓批判をすると決めた自説に都合が悪いからである。

中国には林訳『吟辺燕語』にもとづき「莎劇もどき」の文明戯が上演された歴史的経過がある。従来の研究者たちはそれを林序に投影する。小説(ラム本)から脚本(莎劇)が作り出されたという流れを夢想する。瀬戸博士がそれを取り入れたかどうかは知らない。それにしても無茶苦茶で論理的に成立しない異常なことだ。しかし林紓がムチャクチャだと批判するためにはそれが必要だった。林序の原文を読んで結論に到達するのではない。批判をするために瀬戸博士は林序を勝手に誤読し自分にとって望ましいように組み立てる。記述が不足すると考える部分は贋造した。そこまでするか、とある意味驚嘆しないわけでもない。

筆者は「莎氏之詩(シェイクスピアの詩)」が何を指しているのか瀬戸博士に直接質問したことがある(前出樽本「瀬戸宏報告を評する」)。瀬戸博士がゴニョゴニョと意味不明のことを言い最終的に黙り込んでしまったのはまさにこの箇所だ。莎劇そのものを意味していると説明してもその場において反論も同意もしなかった。理解拒否の意思表示だったらしい。のちの文章には一切触れていないのがその証拠だ。「シェイクスピア作品はまず詩として書かれ」「シェイクスピアはまず詩としてその作品を書き」という意味不明な林紓の認識を捏造するためには正解を提示されることは迷惑だったわけである。

一方の「院本」についても瀬戸博士は莎劇そのもの(上演台本)だと誤解している。自分では説明できない何かから莎氏の「上演台本となった」と勝手に決めつける。ありもしない「シェイクスピア作品発表過程」を瀬戸博士はここに持ち込む。「林紓の認識とは逆であった」と主張し罵りたいだけ。林紓の認識を捏造して前後のつじつまを合わせたつもりだ。そうしなければ林紓批判にならないからである。以前からの偽造をくり返し林紓を攻撃して飽きない。

林序にある「莎氏之詩」について先行研究を以前に点検した。その結果判明したのは次のことだ。研究者たちにはそれが莎劇そのものだという基礎知識がなかった。中国学界の伝統の通り林紓を頭から侮蔑している。林訳をでたらめだと思いついでいる。だから中国人であっても林序を正しく読むことができない。演劇研究専門家の瀬戸博士も同類だ。林序を歪曲して林紓が無知だと主張しても筆者は驚かない。瀬戸博士が批判するために林序を読み、欺いていることを早くから知っているからである。

林紓を痛罵するためなら誤解であろうが欺瞞であろうが捏造であろうがなんでもやる。瀬戸博士がやっていることは約1世紀以前の中国の文学革命派と異ならない。林序を学術的かつ冷静に読むという姿勢をはじめから持たないのである。林紓有罪を根拠もなく声高に喚き続けている。しかもはた迷惑なことに書評の執筆者陳凌虹、河合祥一郎、小菅隼人の3人を巻き込んで結果として彼らの研究者生命に致命傷を負わせた。いかがなものか。

▲指摘10——68頁。『海外奇譚』の漢訳者が「戯本小説」と書いている箇所を解釈して「也不談是否写過小説」と述べる。

←このあやふやな表現を使用するのは誤読に起因する。莎氏が小説を書いたと読みそこなった。瀬戸博士は原著で「シェイクスピアが小説を書いたというのも誤解である」(96頁)と確かに述べている。だが漢訳者はそのようなこと

は書いていない。

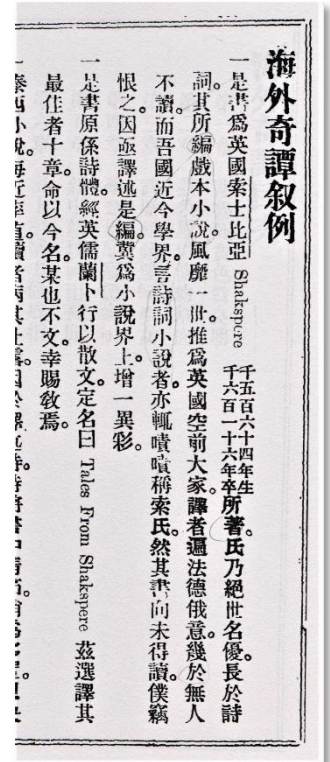
『海外奇譚』の「叙例」は基本的にラム本についての解説だ。底本がラム本だから当然そうなる。そこに莎氏の経歴一部分を書き込んで紹介した。これが基本構造だ。

漢訳者は「叙例」において莎劇が「詩体」でありラム改編本が「散文」として明記する。戯曲と小説の区別をつけている。その認識は正しい。瀬戸博士もそう考える。そこまではいい。しかし瀬戸博士は「戯本小説」

に莎氏を直結させるという誤りを犯す。誤認があらわになる。莎氏が小説を書いたとするのは不都合だ。ゆえに「也不談是否写過小説[小説を書いたかどうかは不問にする]」と誤魔化した。原著の「シェイクスピアが小説を書いたというのも誤解である」の方が誤解している事実がより明確だ。

瀬戸博士が漢語論文の67頁注②に示している樽本「漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序——「区別がつかない論」再び」(2016-2017)で論じた。

研究者が誤読する要因のひとつを述べる。中国学界には過去の漢訳を軽視する傾向が存在する。漢訳者はどうせ正しくは理解していないと根拠もなく軽視してかかる。だからその「叙例」をあるがままには読もうとはしない。自説に有利になるように利用する。ある研究者は漢訳者を侮蔑するための根拠にした。前出の原文「Shakspere」が典型的な例だ。そう綴るラム本が実在する。それを底本にしたからそのまま



表記するのは自然だ。しかしここを取り上げて Shakespeare と書かない漢訳者の知的水準が低いと嘲笑するのである(例:宋莉華2015)。いうまでもなく間違った批判だ。非難する研究者自身の無知をさらしている。

莎氏が小説を書いた——『海外奇譚』の漢訳者はそう記述していると瀬戸博士は読みそこなった。

注意してほしい。「叙例」において漢訳者は「著」と「編」を区別している。「著」は莎氏の創作に、「編」はラムの改編に使用する。さらに鍵語として「戯本小説」と「詩詞小説」のふたつがある。ここの「戯本(詩詞)」と「小説」は分離不可能であることを知る必要がある。瀬戸博士は「小説」だけを取り出した。「シェイクスピアが小説を書いたというのも誤解である」と書いているとおり。

叙例の「其所編戯本小説」が原文だ。「戯本小説」(「詩詞小説」でも同じ)はラムの『シェイクスピア物語』を指す。ここの重点はラムである。「編」と「戯本小説」が決め手となる。言葉を補って訳せば「ラムが莎劇(詩)にもとづき改編した『シェイクスピア物語』」である。

そもそも莎氏が『シェイクスピア物語』を書いたとすること自体が奇妙だとは思わないのか。漢訳者は戯曲と小説を区別している。そう認識しながら書くことだろうか。これを理解不能という。

「戯本(詩詞)小説」とあるのを無視し「小説」だけを莎氏と結びつけたのは瀬戸博士の曲解である。間違いであると知ればよいだろう。

結 論

瀬戸博士の文章は最初から基本に3問題が存在する。嘘をつき語句の捏造をしている。瀬戸博士による林紓批判はもとから成立しない。しかも漢語論文は6頁の短文にもかかわらずこれほど指摘しなければならない箇所がある。

それらを見てなるほどと納得するのはつぎの

ことだ。樽本が提起した3問題のひとつでも受け入れてしまうと自分の誤りを認めることになる。瀬戸博士がすべてを意図的に見ないふりをしている理由である。そうまでして林紓を中傷し名誉を毀損し人権を侵害したいらしい。

瀬戸博士は林紓にとっての大罪人である(胡適から)。根拠のない林紓有罪説を固持して出発時点から少しも変わっていないからだ。林紓に無実の罪を着せ続けて恥じない。ゆえに嘘と捏造を盛り込んだ林紓部分について筆者も反復する。「私が今まで読んできた漢訳シェイクスピア関係の論文のなかで、瀬戸博士のものは最悪最低である」

【注】

- 1) 『冒険世界』第1巻第5号 博文館1908.5.5。渡辺浩司による。樽本注:日本語の底本は“The Age of the Air-ship: Facts and Fantasies” 1907.4
- 2) 梁艶『清末民初における欧米小説の翻訳に関する研究——日本経由を視座として』花書院2015.3.25。198頁で底本を(L. N. Andreyev) W. H. Lowe 訳 *Silence (Silence and other stories, London: Francis Griffiths, Maiden Lane, Strand, W. C. 1910)* と書いている。正しくない。
- 3) 樽本「林訳チョーサー」『林紓研究論集』清末小説研究会2009.5.1。『林紓冤罪事件簿(統合増補版)』日本・清末小説研究会2017.1.15 電字版
- 4) 樽本「文明戯「ハムレット」について——「鬼詔」と「竊国賊」,「莎劇のようなもの(上下)——文明戯シェイクスピア」『清末小説三談』清末小説研究会2019.3.1 電字版
- 5) 次にもとづき補充した。樽本「漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 1-4——「区別がつかない論」再び」『林紓冤罪事件簿(統合増補版)』清末小説研究会2017.1.15 電字版
- 6) 単行本未見。(セキスピーア)、翠嵐生「春宵夜話」『郵便報知新聞』掲載。「緒言」1883.3.14より「ゼ・ウイントルス・テール」3.15-28、「As You Like It」4.5-5.1、「The two gentlemen of

Verona」5.3-24、「ハムレット・プリンス・オブ・デンマーク」6.2-21。川戸道昭、榊原貴教編『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》1 シェイクスピア集I』大空社1996.6.28

- 7) 国立国会図書館近代デジタルライブラリー。また『明治文化全集』第14巻翻訳文芸篇、日本評論社1927.10.5所収
- 8) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』明治文学研究第5巻 春秋社1961.9.15/1966.3.10二刷。57頁
- 9) 近代書誌・近代画像データベース
- 10) 魯迅著、周作人編『呐喊』新潮社1923.8。7頁
- 11) 英文表記は次のとおり。TALES FROM SHAKESPEARE / BY CHARLES AND MARY LAMB / WITH CHINESE NOTES / BY KAN TSAO-LING
- 12) 王杖主編『巖復集』第3冊書信 北京・中華書局 1986.1。699頁
- 13) 王桂妹「旧派的沈黙及林紓の境遇：五四新旧文化論戦在1919」『武漢大学学报(哲学社会科学版)』2019年第2期(第72巻第2期) 2019.3

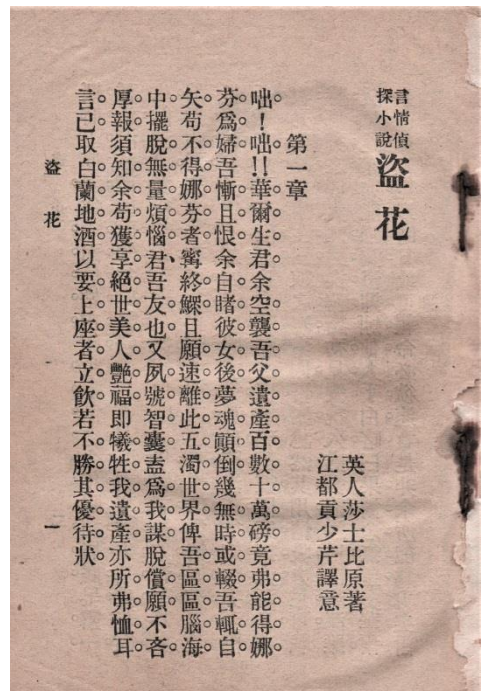
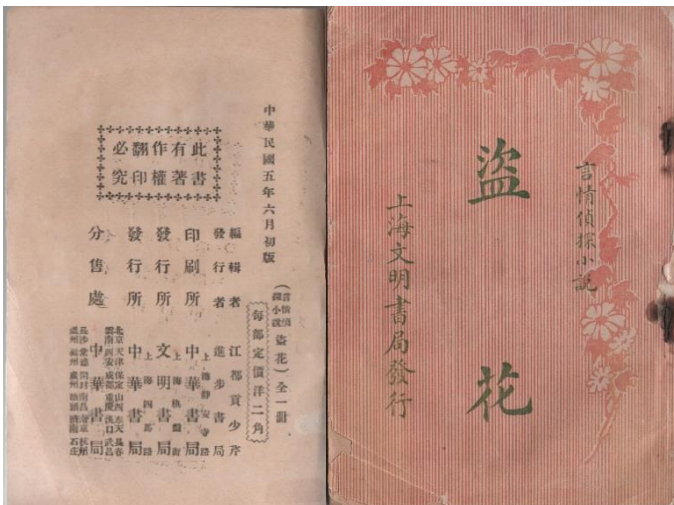
次号の公開は2021年4月1日を予定しています
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

莎士比原著『盗花』について

荒井由美

『盗花』の表紙には「言情偵探小説」と掲げられる。全16章128頁の小型本である。角書は本文、奥付とも同様だ。さらに「英人莎士比原著」と明示されているのには目が離せない。どう見てもシェイクスピアが「言情偵探小説」という内容の作品を書いていた。恋愛をまじえた探偵小説というのだ。「ヴェニス商人」は裁判ものの要素がある。そうすると莎劇に探偵が登場するのだろうか。どこかおさまりが悪い。最初にそういう違和感が出てくる。

手元にある該作品について簡単に説明しておく。



(英) 莎士比原著、貢少芹訳意『(言情偵探小説) 盜花』 16章 上海・文明書局、中華書局1916.6
表紙は「言情偵探小説／盜花／上海文明書局發行」、本文署名は「英人莎士比原著／江都貢少芹訳意」、奥付は「編輯者：江都貢少芹、發行者：進歩書局、發行所：上海・文明書局、發行所：上海・中華書局、中華民國五年六月初版」

發行所は文明書局と中華書局が併記されている。これが事実だ。ただし一般の目録では片方しか示していないばあいもある。

莎士比原著

問題は本文の「英人莎士比原著」だ。また貢少芹には「訳意」がついたり奥付は「編輯者」だったりして一定しない。

原作者は莎士比だから貢少芹は翻訳者になる。多くの研究者はこの表示に従った。実物を読んで確認したかどうかはわからない。今から思うに実際には見なかったのではないか。

文献を略号(樽本『清末民初小説目録』を参照)で示していくつかの例をあげる。

[民外0539]莎士比著、1916初版。原著為劇本、本書改訳為小説

[漢訳2563]角書不記、(英) 莎士比原著、1916初版、原為劇本、訳本改為小説

[現代918] (英) 莎士比原著、1916初版、本書為戲劇改訳成小説

『盜花』の原作者は「莎士比」である。これは林訳と同じ表記を採用している。よく見かける「莎士比[・]亜」ではないことに注意してほしい。莎士比[・]亜とするのは莎氏の現代風表記だ。1字が違う。1字とはいえそれを加えれば実物とは違うことになる。あるいは確認したかもしれないが書き誤ったということだろうか。勘違いは

誰にでもある。

莎士比著であって角書が言情偵探小説だから小説を意味する。中国の研究者はほとんど定型の反応を起こすだろうと予想される。莎氏と小説が一組で提出されると条件反射で判断するといっても同じだ。すなわち林訳『吟邊燕語』を連想する。「戯曲を小説にかえて翻訳した」である。何十年もそれ一本で林訳批判を実践してきた。事実ではないと説明しても聞く耳を持たない研究者がまだにいる。

その効果が予想どおりに出現しているのがわかるだろう。上記の目録3例はいずれも原著が戯曲であるのを小説に書き直したと注記する。

似てはいるがそれとは少し違った説明をする研究者もいる。次のとおり。

[張治 A184]鴛鴦蝴蝶派作家在民国也対訳介莎士比亜作品作出了不少貢獻。……(作品例をいくつかあげる)……。《盜花》, 貢少芹訳, “言情偵探小説”, 1916年上海文明書局(注; 原作不記)。……他們往往將莎翁故事演繹成了通俗小説。

張治の文章を引用したのは理由がある。彼は林訳の不明原作をいくつも探索特定しているからだ。実物を確認したうえで発見のある論文を書いているという印象が強い。信頼できる研究者のひとりだと思っている。だから張治によって納得のいく説明がなされているのではないかと期待したのである。

張治は莎氏作品つまり莎劇の紹介に鴛鴦蝴蝶派の作家たちが少なくない貢献したことを強調する。民国に発表された作品いくつかの例をあげた。指摘した作品は貢少芹訳『盜花』以外では『女律師』『残月重圓記』『如此風波』『夏之夢』などである。その上で「彼ら(注: 鴛鴦蝴蝶派の作家)は往々にしてシェイクスピア物語を大衆小説に書き換えた」と説明した。『莎翁故事』というのだから『シェイクスピア物語』

以外にはありえない。そうすると小説をもとにして小説に書き換えたという理解になる。「戯曲を小説にかえて翻訳した」と主張するのは違うという理由だ。

上の文章において『盗花』の原作が何であるのかを張治は明らかにしていない。『莎翁故事』だといいいながら不明にするのは不可解だ。説明としては不十分である。落胆する内容であるのは残念なことだった。

何を根拠にしているのかわからないが莎劇『ヘンリー6世』が原作だという研究者も出てくる。

【謝天振272】是以小説的形式訳述莎劇「亨利第六遺事」、「盗^マ華」とする

(葉庄新77) 標「言情偵探小説」、『亨利六世』改訳、上海啓明書店1916

作品名が違ったり出版社名が他社になっていたりする。可能性は少ないが別に根拠があるのかもしれない。しかしどこか怪しい。

本文比較のためにたとえば林訳を出してみる。英国莎士比原著、林紓、陳家麟同訳『亨利第六遺事』(上海・商務印書館、中華民國五年四月初版、説部叢書第3集第1編)だ。いうまでもなくクイラー=クーチ本を底本とする。

林訳の刊行が1916年4月であって貢少芹訳本が同年6月だから参考にしようと思えば可能な時間配分になるだろう。

その冒頭と『盗花』の最初から少し引用する。

『亨利第六遺事』——亨利第五生時。以武功鳴於世[ヘンリー5世は在世のおり武功で知られた]。

『盗花』——咄! 咄!! 華爾生君。余空襲吾父遺產數百萬磅[なんとまあ。ウォルスン。おれは父親から數百萬ポンドの遺產を相続したんだ]。

まったく別物であることがわかるだろう。

【通目①528】偵探小説、原著者不記、16章、上海・中華書局1916.6

略号を見てもらえればわかる。これは魏紹昌主編『民国通俗小説書目資料彙編』全3冊(上海世紀出版股份有限公司、上海書店出版社2014.12)の記述だ。ただし示したように角書が違ふ。また莎士比がないし発行所の文明書局も記載しない。実物で見ているはずだがどうして異なるのか理由は不明だ。これ以上ほかの研究論文から引用例をあげるのは紙幅のムダ使いだから紹介しない。

『盗花』について

角書にあるとおりである。「言情」は男女の恋愛を示す。「偵探小説」だから探偵が登場してきて事件を解決する。

恋愛の主軸は1組の男女だ。医者^マの娘娜芬(Nafin ナフィン)と女性教師の息子畢瑪(Bima ビマ)が登場する。原作が英語ならばという仮説で当ててみた綴りだ(以下同じ)。正確ではないだろう。

娜芬に横恋慕した白喀(Pyke パイク)が悪友華爾生(Walson ウォルスン)と悪だくみを計画する。

事件は意外な方向で発生した。舞踏会に参加した娜芬と畢瑪だった。舞踏会で娜芬がその美貌と優雅な身のこなしで大勢の注目を浴びる。彼女が踊っている間に畢瑪が失踪してしまう。

ロンドン第4警察署署長拉因(Rain レイン)が事件を担当する。誘拐犯の海賊黙雷(Murray マーレイ)から脅迫状が届く。それには娘の婿に畢瑪を誘拐した。そう書きながら身代金1万5千ポンドを要求するというちぐはぐさだ。

その探索に派遣されたのが探偵白克利(Buckley バックリー)である。



探偵白克利(左)と署長拉因(右)

海賊黙雷が畢瑪を誘拐した理由は娘亜珠(Azuアズ)の婿にするためだった。未来の婿を地下の石窟に閉じ込めているのは待遇が悪いではないか。小さなところに引っかかる。

物語は畢瑪を島からどうやって救出するかに力点が置かれる。活躍するのが探偵白克利と途中から登場する侍女の雅佩(Jappe ヤッペ)だ。畢瑪の方から積極的に動くことはしない。あくまでも被害者で監禁されたままだ。

侍女雅佩が畢瑪を訪問する



探偵小説には仮面と医術を使用した変相がある。常套手段であるといってい。本作でも多用される。畢瑪が海賊の妻に、侍女雅佩がその娘の亜珠に変相して脱出を試みて港に到達する場面がそれだ。海賊の警備員がそれに騙されるという設定である。

最後は船で島を脱出しそれを追跡する海賊と船上で戦闘することになる。畢瑪は船室にいて戦闘には参加していない。探偵白克利が海賊黙雷の首を取り戦いに勝利するとロンドンに帰還した。

畢瑪と雅佩が馬車へ



漢訳に添えられた挿絵3枚を引用した。3枚目など海賊との海上戦闘が終了した直後である。しかし畢瑪と雅佩は帽子までかぶってまるで旅行をしているような服装なのだ。内容と隔たっている。原作にあったようには見えない。中国人絵師が勝手に描いたものだろう。単行本の編集担当者が注文をつけなかったのだろうか。

最後に種明かしがある。侍女の雅佩は娜芬が変相していたのだった。事件が解決すると娜芬と畢瑪、また探偵白克利と海賊の娘という2組が結婚式を挙げる。その夜、海賊の娘亜珠は父の敵だと探偵白克利を刺殺したのち自殺した。

物語が凄惨に終わるのはいかがなものか。だ

いいち探偵白克利と海賊の娘亜珠が突然に結婚する設定が奇妙だ。伏線もないから説明もできない。探偵小説をうたいながらその探偵が死んではどうしようもない。取ってつけたような結末に鼻白む。

全体をいえば恋愛に探偵をからめた小説である。だが海賊が出現してきてまとまりがない。というように粗い部分が目になってしまうのだった。

娜芬も物語途中で行方不明になる。なぜいなくなったのかと思えば種明かしのとおりだ。恋人畢瑪を救い出すため変相して侍女の雅佩になりすまし海賊島に潜入したという。筋に無理があつてわざとらしい。

言葉の使い方に引っかかる。小さいところだ。

「畢瑪密斯忒」(39頁)とある。ミスタの使い方が「先生」と同じで英語と順序が逆だ。ミスについても同じく「亜珠密斯」(42頁)、「亜珠密司」(56頁)のように使用する。別の作品で「密斯忒〇〇先生」という表現を見たことがある。似ているが少し違う。貢少芹の書き癖かもしれない。

『盗花』には語り手が何度か文中に出てくる。「外史氏曰」と表記する。物語を補足説明するために登場するのだ。ついでながら外史氏名義の単独作品は『娯閑録』(1914-1915)にいくつか掲載されている。同一人物かどうかはわからない。

該書冒頭に遺産相続をしたという白略についての解説がある。すなわち牛乳業者より10ポンドで養子にもらわれた。養父は軍人だったがのちに男爵となりフランスで強盗に遭い落命した(5頁)。本来ならば物語の中で著者が説明すべき部分だろう。訳者が出てくるはずもない。

白略の素性について以上のように説明するのはいいとしよう。しかし養父をさらに詳しく名前を凱脱だという。また羽林軍の中将とも記述する(其父凱脱。為羽林軍中將。曾隨英王喬治。征露西亞。卓著戰績。因賜以男爵)4-5頁。

ならば羽林にアーサー・ウェルズリー(Arthur Wellesley, 1st Duke of Wellington 初代ウェリントン公爵、1769-1852)を当てることができようか。彼はワーテルローでナポレオン1世を破った英国の将軍・政治家である。当時のイギリス国王はジョージ3世(George III)だ。そこまでは一致しているといえる。フランスと戦いアメリカ独立戦争では敗北した。ただしそこまでは解説していない。

引っかかるのはジョージ王に従いロシア遠征に参加したことがあるという個所だ。ロシア遠征というものだからせつかくそれらしい人物を登場させたのが水泡に帰す。

外史氏が小説の外部から介入してくる。原作に不足していると貢少芹が判断したのだろうか。それとも原文にあるのを訳者の補足だと装ったものか。解説なのだから漢訳するに当たって中国人読者のためにイギリスの風習習慣を具体的に補足するのならば理解できる。ところが外史氏のばあいはそうではない。登場人物についての直接的説明だ。物語の進行と密着している。外史氏の立場を判断するのはむづかしい。

雅佩についても同じだ。経歴を説明してイギリス、ロンドンの人、伯父に育てられ10歳の時博打のかたに売られた。転売されてロンドンの達爾原公爵邸の侍女となる。のちに黙雷に拾われ娘の侍女である(32頁)。といっても表面的な補足で終わっている。当然ながら彼女の中身が娜芬であることは最後まで伏せている。貢少芹は探偵小説である意味を理解しているといえる。

たとえば次のような書き方もする。

外史氏いわく、私がここまで書いてきたから畢瑪が誘拐された真相について読者はすでにおおよそ理解したものと思う[外史氏曰。吾書至此。畢瑪被劫之真相。閱者已稍稍得其彷彿矣]48頁

外史氏は該書の「訳意」者(あるいは編輯者)すなわち貢少芹と考えるのが順当だ。その彼が作中で「私がここまで書いてきたから〔吾書至此〕」というのも奇妙な表現ではないか。原作にない部分を補足しているのかと思えば貢少芹その人が該作品の作者のように振舞っているからだ。

必然的に導き出されるのはある疑惑だ。翻訳ではなく貢少芹の創作ではないか。

貢少芹のこと

貢少芹(名は璧、1877-?)は大衆小説作家。李涵秋、張丹斧と揚州三傑と呼ばれる。中西日報館の主筆、『小説新報』雑誌などの主編をつとめた。多数の作品を残している。

ただしその略歴を見ると外国語との接点が見えない。外国語を学習したことがあったのかどうかは不明だ。

ところが少数ながら翻訳作品はある。目録を見るとハガード、大デュマの名前を冠した作品が各1作だ。本当だろうか。実物をみていないからなんとも言えない。

ほかにもロシア人の原作も1作だけ翻訳したことになる。またメアリ・チャムリ(Mary Cholmondeley, 1859-1925)の名前を明らかにして1冊が刊行されている。

ということで上で説明した莎士比原作だ。

『盗花』は莎氏との関係が皆無だ。これは確実に言うことができる。

原作が不明だからいくつかの疑問が自然に出てくる。

英文の原作があるとしよう。ならばなぜその原作者を表示しなかったのか。それほど知られていない作家の作品なのか。それにしても当時の探偵小説といえば連作が普通だろう。探偵を殺してしまう作品を選ぶ理由がわからない。

莎氏の名前を出す必要があったのか。結局はそう問うことになる。関係はない莎氏の名義にすることによってとにかく読者の注目を引ききた

かった。そうとしか思いようがない。

『盗花』の意味を考える。「花」は女性、美女を指すことが多い。物語の内容が海賊による娘婿の誘拐だ。「花」を盗むであれば日本語の「花婿」が当てはまる。“The case of the stolen bridegroom”といったところか。しかし漢語では「新郎」だ。『盗新郎』では直接すぎる題名だろう。それとも「女婿」にこじつけ『盗花』とあいまいに命名して探偵小説らしく見せかけたか。

物語の内容そのものがイギリス探偵小説らしくはない。場所もロンドンと大まかにいうだけ。主となる舞台は亜爾尼島と名づけられた海賊島だ。登場人物の名前は外国人風だがそれだけのこと。なにしろ外史氏が物語途中に何度か顔を出して不自然に感じられる。

以上の違和感を総合すると莎氏原作を詐称した『盗花』は貢少芹の創作だろうという結論である。

莎氏が恋愛探偵小説を書くということ自体が冗談の類に属する。それを作者の貢少芹は狙っていたのかもしれない。ほとんどの研究者は書物の字面だけをたどって莎劇を小説に書き直したものと説明した。冷静に見れば結局のところ貢少芹にかつがれたことになるのではないか。そうではないというご意見があれば原作を特定してから発言されることをお勧めする。 罍

【参考文献】

- 鄭逸梅編著『南社叢談』上海人民出版社1981.2
湯哲声「評説時事趣談軼聞——貢少芹評伝」
范伯群『維揚社会小説泰斗——李涵秋』南京出版社1994.10 中国近現代通俗作家評伝叢書之9

『紅涙影』の原作

(誤解の系譜3)

樽本照雄

本稿では『紅涙影』の原作を明らかにする。漢訳本には英国巴達克礼著と明示してある。従来の説明どおりバーサ・M・クレイ(本名シャーロット・M・ブレイム)の作品であることは間違いない。ただしその後がいままでとは違う。

これまでの理解はクレイ『ドラ・ソーン DORATHORNE』が中心で同時に出発点でもあった。『ドラ・ソーン』を原作として末松謙澄日訳『谷間の姫百合』と菊池幽芳翻案『乳姉妹』がある。幽芳『乳姉妹』を重訳したのが漢訳『一束縁』だ。さらに翻案したのが『紅涙影』となる[少瑜12][飯塚14][楊鄒18][鄒18]。

研究者によって事実把握が小さな個所で異なっている。ただ大きくまとめると以上のようになると考えていい。日本、中国、台湾、アメリカにおける研究者たちの共通認識である。堀啓子、飯塚容を含めてどうしても『ドラ・ソーン』から離れることができない。イギリス→日本→中国という伝播の経路が研究の基本にあって固定して動かなかつた。従来からの定説を知っていなければ本稿の意味を理解するのはむづかしいだろう。そう思うから重ねて説明している。

その定説の一部が打破されたのは2020年1月16日になってからだ。月日まで明記できる。なぜなら現在ウェブサイトと同時に進行的に研究発表があるからにほかならない。

まず『一束縁』の原作がブレイム『ライル卿の娘 LORD LISLE'S DAUGHTER』であるとの指摘があった[張治20]。引きつづいて1週間後の2020年1月23日に『乳姉妹』の原作(『ドラ・ソーン』だといわれていた)も『ライル卿の娘』であることが確認された(清末小説研究会ウェブサイト「速報」)。『ドラ・ソーン』原作説の崩壊である。そうしてその日訳『乳姉妹』および漢訳『一束縁』はそれぞれが独立して翻訳されていたことも判明する。影響関係があるといわれているのだ。それが覆った。まだ続く。それらと強い関係があるという『紅涙影』の問題が浮上するのだ。それでは該漢訳の原作も同じく『ライル卿の娘』なのか。

調べてみれば予想を裏切る結果になった。『ドラ・ソーン』ではない。また『ライル卿の娘』でもない。原作は第3のクレイ作品なのだった(2020年3月21日付、同ウェブサイト「速報」)。

問題にしている『紅涙影』は次のとおり。

(英) 巴達克礼著、嶺南息影廬主(陳梅卿)訳『(哀情小説)紅涙影(一名外国紅樓夢)』24回4冊 広智書局 宣統1(1909)未見/上海・世界書局1922.6再版/1927.8五版/1933.6七版



影印本

調査の結末を先取りしている。『紅涙影』について公表された従来の立論がすべて成立しない。原作ではない作品を持ち出して論じているからだ。

余計なことだが該作品について関連論文を発表してきた研究者たちに同情する。幽芳訳『乳姉妹』の原作を明らかにした時と同じ状況が出現したからだ。悲惨すぎて再度説明する気にならない。学術上のことだからご容赦いただきたい。

発言者については後ろの「参考文献」を見てほしい。

先に民国初期同時代人呉宓の日記を紹介する。問題の所在が確認できる。つづいて現代の研究論文1篇を主に取り上げる。論文名に『紅涙影』を使用している潘少瑜である。最小限におさえて一部を引きながら概略を説明する。必要に応じてほかの論文も示すばあいがある。ただしくり返しになるのでいちいち引用しないのが基本方針だ。

呉宓の印象

1912年当時大学生だった呉宓の読後感想を見ておく。同時代の読者が漢訳本2種を読んでどう受け取ったのか。興味深い。

『一東縁』は『紅涙影』の原本ではないかとの印象を彼は強く抱いた。ここでいう原本というのは2作品が同一原作から漢訳されたという意味だ。

[呉宓1-253] (1912年7月30日) 余読《一東縁》、頗疑其即《紅涙影》原本、其中事實酷似而稍有不同。然《紅涙影》編者自言訳此書時改編之處甚多、且叙述加詳、装点甚富、与原本亦大有異点、則其書或即由其原本直訳者歟？又兩書所載著者之名、同為英人而音極類似、或即同一之人而訳音各別耶？以意度之、則兩書當出一源也。

(1912年7月30日) 『一東縁』を読んで

『紅涙影』の原本ではないかと深く疑う。そのなかの事柄はひどく似ているが少しは異なる。ただ『紅涙影』の編者は本書を翻訳するとき書き換えた箇所がとても多いと述べているし詳しく加筆し装飾も豊富だ。原本とは大いに異なる点があるというならばその書は原本からの直訳になるのだろうか？また両書の著者名は同じくイギリス人で音もよく似ている。あるいは同一人物を別々に訳したということか？考えるに両書の出所はひとつに違いない。

呉宓が指摘するのは『一東縁』と『紅涙影』の内容が酷似している点だ。ただし『紅涙影』には書き換えと加筆の部分が多い。またその原作者名の漢訳も問題にする。『一東縁』(1906)は英国李来姆だ。一方の『紅涙影』(1909)は英国巴達克礼である。呉宓はこの漢訳がよく似ているという。

だがはたしてそうだろうか。李来姆はブレイム(BRAME)だ。巴達克礼はバーサ・[M・]クレイ(BERTHA M. CLAY)ということはおわっている。その漢音訳 Bolaimu と Badakeli が類似しているといっても B だけではないか。呉宓の説明には無理がある。今だからこそブレイムが本名でクレイは筆名だと理解される。しかし呉宓の時代にそこまで判っていたとは考えにくい。だいいち原作について明記していない(これは当然のことで2020年まで本当の原作は不明のままだった)。ふたつの漢訳を並べて読んでその異同を言っているだけだ。

それにしても呉宓が当時読んで書いているくらいに両書は内容が似ている。同一原書を翻訳したと受け取った最初の例だ。後の研究者は『一東縁』と一緒に『紅涙影』を取り出すことになる。

従来の学界常識では出発点に『ドラ・ソーン』がある。それを漢訳して『一東縁』ならば類似の『紅涙影』も同じ根から発生した作品だと推

察した。『ドラ・ソーン』しかないのかと疑問に感じるくらいに研究者たちの主張は一貫している。変動しない。間違いの主要原因がここにある。

以上のまとめ方が日本と中国では受け入れられ継承されていた。日本では謙澄『谷間の姫百合』と幽芳『乳姉妹』になった。中国の『一束縁』と『紅涙影』を合わせて潘少瑜は全体を『ドラ・ソーン』文学家族という。ついこの前までそういう認識だった。

潘少瑜の説明——『ドラ・ソーン』一族

その潘少瑜論文から引用して日本語訳をつける。

[少瑜12-14]筆者根據《紅涙影》的故事架構進行域外小説文本的對照閱讀，初歩肯定此書最原始的底本應為伯莎・克雷《朶拉・索恩》；但根據情節的相似度研判，《紅涙影》又並非陳梅卿直接從《朶拉・索恩》原著翻譯得來，而是以日本作家菊池幽芳的翻案小説《乳姉妹》為依據，再進行更大幅度的改寫。

筆者は『紅涙影』の物語構造にもとづき海外小説の本文について対照閱讀を進めた結果、本書はバーサ・[M・]クレイの『ドラ・ソーン』を根本的に底本としていることを差し当たって肯定する。しかし筋立ての類似度により『紅涙影』はけっして陳梅卿が『ドラ・ソーン』の原著から直接翻訳したものではなく日本作家菊池幽芳の翻案小説『乳姉妹』に依拠しながらさらに大幅な書き換えを行なったと判断する。

『紅涙影』は陳梅卿が原作『ドラ・ソーン』にもとづきさらに幽芳『乳姉妹』を取り入れたうえで書き換えて作り上げたとする。筆者が言い直せば『ドラ・ソーン』と『乳姉妹』の混合作品が『紅涙影』だ。

潘少瑜は『一束縁』については論文の立証材料から外した。その理由は次のとおり。

[少瑜12-14]必須先說明的是，從《朶拉・索恩》的文学家族中，筆者之所以選取《乳姉妹》和《紅涙影》作為《朶拉・索恩》的對照分析對象，而非《谷間の姫百合》或《一束縁》，乃是因為前二者是經過大幅改寫的翻案小説，並非單純的翻譯，其間文本的變異有較多值得探討之處，也較易從中發掘文化轉譯的深層內涵。

まず次のことを説明しておく。『ドラ・ソーン』文学家族の中から筆者が『ドラ・ソーン』との対照分析の対象に選出するのが『乳姉妹』と『紅涙影』であって『谷間の姫百合』あるいは『一束縁』ではない理由である。なぜなら前二者は大幅な書き換えを経た翻案小説であり純粋な翻訳ではないからだ。だからこそ文章上の変異は探索するに値する個所がより多い。そこから文化を転訳するという深層構造をより容易に発掘もできる。

潘少瑜の認識では『ドラ・ソーン』を中心にふたつの翻訳集団に分かれる。幽芳『乳姉妹』と陳梅卿『紅涙影』は原作から離れている翻案だ。一方の謙澄『谷間の姫百合』と『一束縁』は原作に忠実な翻訳ということになる。潘少瑜の立論に必要なのは『一束縁』ではなかった。それだけのことだ。

また「文学家族」という言葉を使用している。同じ原作にもとづいた複数の翻訳、すなわち血のつながった集団が年月をへて存続していることを意味する。だから「文学一族」と訳しても同じだ。

先行研究が『ドラ・ソーン』を中心にしている。潘少瑜が「文学家族」という単語を用いていることからわかる。さらに漢訳を上記のとおり直訳と翻案のふたつに分類した。どのみち

『ドラ・ソーン』原作という思い込みから抜け出すことができなかった。

結論めいたことを先走っていえば本当は2分類ではない。翻訳の質が問題ではないのだ。原作そのものが違っている。『ドラ・ソーン』と『谷間の姫百合』、『乳姉妹』と『一朶縁』、さらに『紅涙影』の3分類にしなければならなかった。著者はクレイ(本名ブレイム)で共通する。しかし作品は独立した3種がある。『ドラ・ソーン』はそのなかのひとつにすぎない。原作1冊が根元にあっていくつかの翻訳が出てきたと考えるから誤る。

潘少瑜が説明するとおり幽芳『乳姉妹』は『ドラ・ソーン』との類似性が指摘されつづけてきた。『紅涙影』でも筋立てが似ているというのが最大限に考慮される。同根だと考えるから比較対照して異なる個所は訳者による創作書き換え翻案にしてしまった。

[楊鄒18-429]『ドラ・ソーン』のもう一つの中国語訳は『紅涙影』である、1909年に上海広智書局により出版された。(注:書誌説明は省略)『紅涙影』では、イギリスの貴族という設定はそのまま用いられているが、細かい部分は書き直されている。前半にある貴族の後継者が身分の低い女性と恋愛し、親に隠れて結婚、さらに出産するという描写から見れば、原作『ドラ・ソーン』の設定を用いているが、後半は陳梅卿の創作と見てよい。また、双子の設定を変更し、娘をすり替える設定は『乳姉妹』や中国語訳『一朶縁』からヒントを受けたと思われる。『紅涙影』は翻訳というよりリライトされた作品である。

[楊鄒18-433]『ドラ・ソーン』の三つの中国訳のうちに、『紅涙影』は大きくリライトされ、一番原作に遠い作品であるにもかかわらず、これに基づいて脚色や創作された映画や地方劇は数多く存在する。まさに

中国で『ドラ・ソーン』が新たな生命を得た起点の一つだと考えられる。

楊文瑜+鄒波の考えは従来どおりということができる。『ドラ・ソーン』を中心とした文学一族である。「リライト」というのは書き換え、日本でいう翻案という意味なのだろう。また[鄒18-34]は『ドラ・ソーン』をリライトした『紅涙影』とのべて同趣旨である。異同箇所は訳者が勝手に書き直し創作したと断定して疑わない。原作がなんであれ『紅涙影』が映画や演劇になったというのは事実だろう。そこは問題がない。

クレイは多作の大衆小説家である。物語の大筋が同じで人物、場所、細部などを多少変更した作品もあるはずだ。そこに気づかず『ドラ・ソーン』ばかりを問題にした。くり返すがそれが失敗の最大原因である。特定の研究者について言っているのではない。

事実『一朶縁』の原作が『ドラ・ソーン』ではないことがすでに明らかになっている。その瞬間に潘少瑜、飯塚容、楊文瑜、鄒波らの立論根拠は崩壊してしまった。

研究者当人たちが書籍にもとづいて真摯に取り組んでいることはわかる。しかしその熱心さに反して成果がともなっていない。関係のない作品を漢訳の原作だと頭から信じ込んで議論しているからだ。

『紅涙影』を論じるためにはまずなによりも原作の探索と特定が先行すべきだ。翻訳小説研究では基礎であり当然のことだと思う。当たり前のことを述べるのはそのことが実行されていないからだ。

『ドラ・ソーン』は『一朶縁』と『紅涙影』の原作ではない。ところが研究者たちはクレイの該当原作を基礎において漢訳のどこが同じでどう異なっているのかを直接比較対照し論じているのが事実だ。意味があるとは思えない。やっかいなのはその原作不明という意識が研究者

にないことだ。『ドラ・ソーン』原作説が動かずに根底に据えられている。思い込んでいるから迷いが無い。だから『紅涙影』についていえば原作が別にあるかもしれないと想像する人はいないのだ。しかしはっきり言って出発点からして間違っている。傍から見ればなにがしたかったのかということになる。

清末翻訳小説に対する誤解と偏見

クレイ原作の漢訳に関して研究が迷走しつづけている。その事実が判明した。

なにが原因か。心当たりがひとつある。研究者たちは清朝末期に刊行された漢訳(翻訳)小説に対して誤解と偏見を持っているからではないか。そう強く感じる。

清末のことだ、どうせでたらめな翻訳をしているに違いない。豪傑訳ということばもある。シェイクスピアの戯曲を平気で小説にかえて翻訳している。戯曲と小説の区別がつかない。訳者が無知すぎる。省略誤訳が多い。二流三流四流の価値のない作品を大量に漢訳した。実際の漢訳を見れば原作とはかけ離れた漢字を当てている。特に地名、人名がひどい。

学界の主流となって現在も続く文学革命派の主張主観がそれである。清末民初に刊行された翻訳小説の価値を極端に低く評価した。中国学界ではそれが常識となっているとわかっていい。芸術基準ではなく政治基準を優先させた結果である。林訳がその槍玉にあげられた。林訳に対する評価は総じて驚くほど低い。曲解であるといっておく。

いくつもの事例をあげることができそうだ。だが印象操作に終始する。批判をすると決まって同じ表現になっている。その根拠を具体的に示した人はほとんどいない。鄭振鐸は林訳を批判して例外的に証拠作品を提示した。しかしそれは虚偽であった。林紓に濡れ衣を着せたのだ。

固有名詞の漢訳が原文とかけ離れているばあいは疑問を持つ、あるいは警戒するのが普通の

態度ではないかと思う。

たとえば『ドラ・ソーン Dora Thorne』の Dora を末松謙澄が日本語に翻訳して「虎」とするのはわかる。通音するからだ。ところが Dora (ドラ) が漢訳されるとなぜ「麦加来 Maijialai (マーガレット)」「阿礼斯 Alisi (アリス)」になるのか。現代漢音で読めばまったく別の音である。首をひねる。同一人物を漢訳して別物にするのは基本的に不合理である。ここまで異なるのはもしかすると原作ではないかもしれない。そう思わなかったのか。

ところがいくら乖離していても同じものに見えるという。筆者に言わせれば奇妙な感覚だ。『一束縁』は『ドラ・ソーン』とは別作品だった。ならば『紅涙影』も同じことではなからうか。

先行研究に対する疑問

クレイ『ドラ・ソーン』を原作とした漢訳2種がある。鄒波がそう認定して人物名一覧表を作成した。漢訳作品との対比箇所だけを引用する[鄒18-28] (幽芳『乳姉妹』は除く。一部×印を挿入)。

以上で説明したように『ドラ・ソーン』が漢訳されて『一束縁』『紅涙影』になったという強固な前提で鄒波は論じている。ここに示された人物は互いに同一であることを意味する。だから対照表なのだ。

Dora Thorne	一束縁	紅涙影
×	史戴芬 (Stephen)	安浩伯
Dora Thorne	麦加来 (Margaret)	阿礼斯
Ronald	垂脱 (Arthur)	依歴
×	江素珊 (Susan Rivers)	戴蘭西
Beatrice	列德 (Rita)	阿連
Lily	黛茜 (Daisy)	美儂
Hugh	賴虚登 (Ralph Ashton)	×
Lionel	李飛力 (Philip Lisle)	×

『一束縁』の原作はブレイム『ライル卿の娘

LORD LISLE'S DAUGHTER』である[張治20]。一覧表の漢訳カッコ中に筆者が原文を記入した。ご注意ください。鄒波の元の一覧表には当然ながらその記入はない。

上表の『一束縁』部分を見れば一目瞭然だ。英文を直訳して漢字表現になっていることがわかる。『ドラ・ソーン』とはもともと関係がない。

「×」で示した人物は英文原作に存在しない。すると研究者はその漢訳箇所は『一束縁』の訳者が勝手に創造して付け加えたと決めつけて論じた。『紅涙影』ならば「×」部分は幽芳『乳姉妹』、漢訳『一束縁』から補充したという。根拠のない説明である。原作を誤解して文章の表面を比較対照しているだけだからそうなるのしかたがない。

なんどでも言う。Dora (ドラ) を漢訳してなぜ「麦加来 (マーガレット)」「阿礼斯 (アリス)」になるのか考えなければならなかった。登場人物の名前をわざわざ別物に漢訳する必要がどこにあるのだろうか。幽芳がマーガレットに「真野君江」と日本人の名前を創造して置き換えたのとは事情が基本的に違うのだ。

いうまでもなく原文にある固有名詞を異なった形に漢訳する、あるいは新しく作り出すことには大きな困難をとまなう。ましてや原作が戯曲であるばあいそれを小説化するには相当の労力を要すると考えるのが普通だ。簡単なことではない。それなら戯曲は戯曲のままに漢訳したほうがはるかに容易だろう。そこを無視して当時の漢訳者はいい加減に小説化したとか勝手に漢音を当てたとか創作翻訳したとか短絡するのは先人の訳業に対する侮辱である。現在の自分を過去の中国知識人に投影してはならない。清末の翻訳は作品によって質が異なる。しかし当時の各人は非常な努力をして原文に取り組み漢訳作品を公表しているのがほとんどだ。

『一束縁』の登場人物名はどう見ても原作『ライル卿の娘』を漢音でそのまま写している。

ただし題名は別だ。内容の一部を取り出して意訳した。

同じく『紅涙影』の「阿礼斯 (アリス)」が Dora というのでは音がまったく違う。無理すぎる。そこに気づかないのは不思議というよりほかない。原因はひとつだ。『ドラ・ソーン』を原作として漢訳したという結論が先にある。資料を積み重ねて結論に至るのではない。その反対で結論にあわせて立論しているのだ。その結論に外れないように登場人物一覧表を作成した。思考の方向がまったく逆だから奇妙な結果になる。これ以外の理由は考えられない。鄒波に限らない。日本の研究者でも同様だ。

『一束縁』の好例前例がある。『紅涙影』のばあいも『ドラ・ソーン』ではなく別作品ではないか。そう推測するのが常識だろう。

『紅涙影』の原作

とりあえず漢訳第1回の冒頭を見てみよう。

話説英国尼華士里府。昔日有一藩侯。姓安官名克信。乃英国名門世胄。累代簪纓。祖上曾征平蘇格蘭土寇。克復了多少城池。

イギリスの尼華士里府に昔ひとりの藩主がいた。姓は安、名は克信でイギリス名門貴族の後裔である。代々の貴族で先祖はかつてスコットランドの土民を征伐しいくつかの都市を奪回したことがある。

固有名詞の漢訳はそれだけを見て原文に復元することは困難だ。漢字のままにしておく。

ここには眉注がついている。「先将家世鋪叙鮮明。在今日新小説界稍嫌率直。然是中国小説正格所謂開章明義也 [まず家族から説明するのは今日の新小説界ではややあっさりしすぎかもしれない。しかし中国小説の規格でいえばいわゆる冒頭で主題を説明するわけだ]」

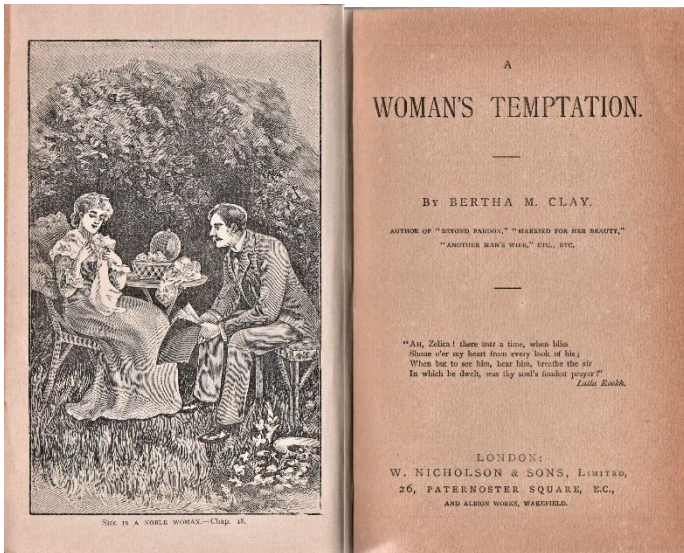
眉注が意味するのは中国小説風に書き換えているということだ。原文との隔たりが大きいと

原作探索の難易度が高まる。冒頭部分を見ているだけでは原作に到達できない。漢訳の途中も登場人物についての長い描写が続く。原作と相当に異なる個所があることがあとで判明した。

原作探索の手がかりになるのは普通は固有名詞だ。あるいは年月日、季節、貨幣の数字などもある。

『紅涙影』のばあいはなによりもバーサ・M・クレイの作品であること。その上で地名の「尼華士里」と人名の「安克信」だ。ほかの部分に出てくる女性名「阿礼斯」などを手がかりにして見つけたのが次の作品である。

BERTHA M. CLAY (本名 CHARLOTTE MARY BRAME, 1836-1884) “A WOMAN'S TEMPTATION.” LONDON: W. NICHOLSON & SONS, LIMITED, 刊年不記(架蔵本。ほかに1880年影印本。雑誌初出は1875未見)。またウェブサイト open library (1880)、同じく hathi trust (1880、1884)。



刊年不記 口絵あり

日本名『女の誘惑』の初出は無署名で雑誌“FAMILY READER”(1875.6.12-10.16)掲載だという[LAW12](未見)。BERTHA M. CLAY “DORA THORNE”ではないことが確定する。同時に“LORD LISLE'S DAUGHTER”でも

ないのだった。

クレイ『女の誘惑』と漢訳『紅涙影』

念のために原作の冒頭部分を掲げておく。漢訳とは大きく異なる。

Madame de St. Lance sat alone in her own room, an apartment that long years ago had been the boudoir of the most beautiful and most noble the Duchess of Vallentinois.

サン=ランス夫人は自分の部屋にひとりで座っていた。昔はヴァレンティーノ公爵夫人の最も美しく最も高貴な私室だった。

サン=ランス夫人(Madame de St. Lance/戴蘭西)がひとり娘と南フランスのプロヴァンス地方に住んでいた。フランス革命のため没落してこの地方に移住し夫の伯爵はすでに死去している。そこに女の子を連れたイギリス紳士(Hubert Ruthven 今はLord Clancey/安浩伯)が訪問してきた。パリで知り合いだったという。これが原作の始まりである。

紳士が説明する。伯父のクランシー卿(Lord Clancey/安克信)から彼を喜ばす結婚をしろといわれていた。にもかかわらず校長の娘アリス(Alice Luttrell/阿礼斯)を愛してしまった。秘密裏に結婚してフランスに移住すると女の子が生まれた。しばらくして妻子と離れて伯父のもとに戻らざるをえなくなった。そうこうするうち伯父が逝去し妻子を連れ戻しにフランスへ行く。ところが病気のアリスは死んでしまった。パリで面識のあった夫人のもとに娘を預けるために訪問したのだ。イギリス紳士から夫人に提示された条件が長年にわたって高額な扶養教育費を支給するというものだ。経済的に困窮していた夫人は女の子を預かることを承知した。幼児を他人に預ける設定が『ライル卿の娘』と共通する。

原作の舞台がイギリスとフランスだ。本稿ではフランス人名(サン=ランス夫人)もそれらしく読んでおく。ただし当時のイギリス、アメリカでは英語読みをしていただろうと思う。

預けられたイギリス貴族の娘ニナ(Nina/n 妮娜)はベル(Belle/美儂)と名づけられて夫人の娘レーヌ(Reine/阿連。英語ではレイン)と一緒に育てられる。reine(レーヌ)はフランス語で女王を意味する。作中では幼児のころの態度がそうだったという説明がある。これは同時にレーヌがのちにイギリス貴族の娘に成りすます伏線でもある。イギリス紳士はネヴァーズリ(Neversleigh/尼華士里)に住む伯父の地位を継承してアーンコート卿だ。のち身分にふさわしい2度目の結婚をして子供もできた。最初の失敗した結婚と娘のことについては沈黙を守った。ところが8年後、熱病にかかった息子と後妻を一瞬にして失う。

In one short week he lost both wife and child. Darnley was seized with a violent attack of fever, and Lady Arncourt, who worshiped her only son, would insist upon attending him herself. She caught the fever from him, and, after a few days' illness, both died. p.129

短い1週間で彼は妻と子供の両方を失った。ダーンリーは激しい発熱に襲われ一人息子を熱愛したアーンコート夫人は自分が付き添うことを主張した。息子の熱病が彼女にうつると数日間の病気でふたりとも死去した。

ダーンリー(Darnley/丹利)は息子の名前だ。1週間という短期間にすべての悲劇が起こった。原文は熱病により妻子を失ったことが簡潔に描写されている。アーンコート卿がその事実により精神的に打ちのめされたという説明が続く。上の部分が漢訳では次のようになる。

不料春間偶感風寒之疾。臥病了十余天。漸变了春温[瘟]重症。医治無効。就嗚呼哀哉。一命去世了。浩伯遇着這場意外的事。万分悲痛。自不待言。那哈列頓思念着親生的愛子。日夕悲傷。哭到兩目失明。漸成了七情屈結的癆病。可憐他鷄骨支牀。瘦到一個不像人形的樣子。第11回150頁

春に思いもかけず風をひいてしまい10日余臥せていたが春の流行病は重症に激変した。治療の効果はなく悲しいことに一命が失われてしまった。ヒューバート(アーンコート卿)はこの意外な事件に遭遇してひどく悲しんだのは言うまでもない。アイソラ・モレルトン(Isora Morelton アーンコート夫人の名前/哈列頓)は自分の愛する息子をしのび日夜悲嘆にくれ両目が見えなくなるまで泣いた。徐々に感情が鬱屈して全身疲労になってしまった。かわいそうに彼女は鷄の骨のように痩せて寝台に横たわるとまるで人間らしい姿ではなくなった。

漢訳は原作をふまえている。ただし直訳ではない。後妻の様子を細かく描写して加える。上の箇所はそれでもまだ加筆が少ないほうだ。原作とは無関係に陳梅卿の筆による長々しい描写が続く別の場所もある。それに比較すればだが、とりあえず『女の誘惑』が『紅涙影』の原作であることの証拠である。

そうしてフランスの夫人にあずけた娘を呼び戻すことになった。

娘ふたりを育てた夫人だった。イギリスより手紙がきてベルを含めて3人を呼び寄せたいという。夫人は心変わりして自分の子レーヌにアーンコート卿の娘だと嘘の身の上を吹き込む。ベルの出自を盗んだ。乳姉妹の片方が他人に成りすますのが『ライル卿の娘』と類似する。ただリタ(Rita)が自主的能動的に偽ったのとは異なりレーヌのばあいはその母親による虚言だ。

レーヌはアーンコート卿邸でも陽気に女王のように振る舞った。レーヌとベルが貴族の若者エリック (Eric/依歴) との三角関係になるというのも『ライル卿の娘』の筋立てと似ている。ただし恋路をじゃまするラルフ (Ralph Ashton) は登場しない。ラルフはリタを射殺した。しかし『女の誘惑』では異なる。レーヌはエリックが自分ではなくベルを愛し彼女と結婚することを知った。悪魔がレーヌを誘惑した。ベルさえいなければいい。ベルが突然の病に倒れる。クレイ原作にはその謎解きと犯人探しの要素も配備されている。レーヌがベルの毒殺を実行する現場が押さえられた。

Then from the pocket of her dress she took a small vial, and slowly, carefully, steadily dropped, counting the drops, some of its contents.

There could be no more doubt as to who was the poisoner.

She raised the bottle to the light; as she did so, Eric caught a glimpse of her face.

“Great Heaven !” he cried, “it is Reine !” p.347

それから彼女はドレスのポケットから小さなガラス瓶を取り出しその中身を滴を数えながらゆっくりと慎重にしっかりと落とし込んだ。

誰が毒殺者であるのかそれ以上の疑いはなかった。

彼女は瓶を持ち上げ光にかざすとそれによってエリックは彼女の顔を垣間見た。

「なんとということだ！」彼は叫んだ。

「レーヌだ！」

那女子便向懐内摸了一個寸許高棗子大的綠玻璃瓶出來。拔去瓶塞。把一種似膠非膠的濃汁。斟了兩滴在那藥瓶內。斟畢。將綠瓶塞着。却把那藥瓶搖了十數下。好像搖鈴一般。又在燈下再三細看。似是十分小心的

様子。依歴在暗處看得清楚。知那女子定是投毒的凶手了。急忙由耳房內衝出一手。搶了那綠瓶攔着那凶手細看。原來凶手不是別人。却是阿連。第23回146-147頁

その女は懐から棗くらの大きさの小さな緑のガラス瓶を探り出した。瓶の栓を抜くとニカワのような濃い汁を2、3滴薬瓶に垂らした。それが終わると緑の瓶の栓をした。その薬瓶を十数回まるで鈴のように揺らし燈火のもとで再三よくながめ十分に注意をした様子だった。エリックは暗いところではっきりと見た。その女はまさに毒を投入した犯人に間違いない。急いで小部屋から片手をのぼし緑の瓶を奪い取りその犯人を押し止めた。なんと犯人はほかならぬレーヌであった。

漢訳では説明がより詳しくなっている個所もある。だが原文をほぼ直訳したといっていざらう。

毒殺をしようとした動機についてエリックがレーヌを問い詰めた。レーヌはそれまでに装っていた上品さと優雅さをかなぐり捨てて絶叫する。漢訳第23回にそれがあるのだが大幅に加筆する。本稿の目的は『紅涙影』の原作を特定することだ。原文と漢訳を比較対照するのは興味深いといえることができる。しかしこれについては別に論じる必要があるだろう。本稿の目的から離れるし長くなるので省略する。

レーヌは身ひとつでアーンコート卿邸を出て行った。後に彼女はパリで「ボヘミアの女王 the Queen of Bohemia」と呼ばれた。ここでレーヌの名前と「reine 女王」がまわりまわって結びつき原作は完結する。

ただし漢訳はここを改変した。レーヌが「ボヘミアの女王」になったことを翻訳しない。レーヌは名前を変えドイツを経てロシアのモスクワへ流れていった。ある尼寺で死亡したことに書き換えた (第24回)。

漢訳『紅涙影』の登場人物表

上に掲げた地名あるいは登場人物の漢訳に原文を当てはめなおして一覧表にする。

尼華士里 (地名)	Neversleigh
安克信	Lord Arncourt (the late Lord Clancey)
(璐環) 安浩伯	Hubert Ruthven (Lord Clancey Arncourt)
阿礼斯	Alice Luttrell (先妻、ニナの母)
妮娜→美儂	Nina Ruthven → Belle
哈列頓	Isora Morelton (後妻)
戴蘭西	Madame de St. Lance
阿連	Reine
依歴	Eric Chilvers

固有名詞の漢訳はたくみだ。

地名の Neversleigh を尼華士里とする。Arncourt は安に、Clancey が克信になる。Ruthven は璐環だし Hubert には浩伯を当てた。Madame は戴に聞こえるといわれればそうだろう。Nina が妮娜でそのままだ。Belle は現代音では貝爾と表記する。もとがフランス語で「美しい」という意味だから意識して「美儂」というのも理解できないわけではない。もしかしてここだけ方言音に拠っているのだろうか。それもおかしいことだがそうであればそれでもいい。Reine を阿連とする。漢訳者の陳梅卿は英語読みを採用したとわかる。以上のように基本的にそのまま漢音で翻訳していることができる。

ただし本文の方は直訳というわけではない。冒頭部分を見てもらいたい。まるで別作品の様相を呈している個所もある。筋立てと登場人物はあくまでも基本的にクレイ原作を踏まえる。ただし加筆部分が相当に多い。原作よりも説明がかなり詳細になっている個所もある。そればかりか訳者陳梅卿は原作とはまったく関係のない内容を勝手に追加してもいる。第10回(第2

冊130頁前後)ではアイソラ(哈列頓)がドイツで学んだ天文学にことよせて当時の清朝中国を批判する。クレイ原作には存在しない。

クレイ原作は版本によって異なるが総268、304、396頁くらいのものだ。しかし漢訳は加筆が多くほどこされたために4冊合計797頁の大冊に膨れ上がった(巻1巻第1-6回169頁、巻2第7-12回207頁、巻3第13-18回210頁、巻4第19-24回211頁)。これほど大量の加筆がある。直訳というわけには当然いかない。原作をふまえながら同時に翻案した作品であるといっている。

『紅涙影』と『一束縁』は原作が異なる。作者が同じという以外に両作品は基本的に関係がない。ただクレイの原作2種の主要な筋運びそのものが基本的に似ている。呉宓を含めて研究者が勘違いするのも無理はないかもしれない。

『女の誘惑』とは

クレイ原作の題名『女の誘惑 A WOMAN'S TEMPTATION』について説明しておく。

問題は a woman の意味である。a woman's temptation という書名になっている表現がそのまま使用されている原文中の2例を示す。

レーヌによるベル毒殺未遂事件が発覚したあとだ。サン＝ランス夫人が娘レーヌにイギリス貴族の出身だと嘘を吹き込んだ事実を皆に告白した。それを聞いたアーンコート卿のことばに出てくる。原文と漢訳を並置する。

I pardon you — it was a woman's temptation, and you yielded to it. pp.367-368

そなたを許そう。それは女にとっての誘惑だった。そしてそなたはそれに負けた。

不過一時見利起心。偶為慾念所誘惑便了。第23回171頁

しかし利益に心がふと動かされ欲望に誘惑されたのだ。

原文の temptation は名詞で「誘惑」だ。目の前に出現した誘惑に夫人は身をゆだねて嘘をついた。

漢訳は「誘惑」という単語をそのまま使用して原文の意味を正しく理解している。

a woman というのは女性一般を指す。ただし原文の前後から判断すれば当然サン=ランス夫人その人をいう。

フランス没落貴族というのが鍵語になる。うがってみれば該小説のばあいはフランス人に罪を背負わせた。小説内容を汲んで別の題名をつけるとすれば『サン=ランス夫人の誘惑 MADAME DE ST. LANCE'S TEMPTATION』としても不思議ではないところだ。名前を出した『ライル卿の娘 LORD LISLE'S DAUGHTER』という例もある。ただクレイは該作について固有名詞を出さないで抽象的な『女の欲望』と命名した。書名としてそうするのは理解できる。

金銭的な欲望にかられてその誘惑に負けてしまうのが女性一般であるとすればあまりにも広げ過ぎて不適切だろう。だいいち原作者のクレイを含めて女性に失礼ではないか。現代だからそう思う。しかしクレイはそこに不都合があるという意識を持たない。当時の読者と同じ認識と価値観を共有していた。だからこそ大人気を博す大衆小説家になることができたといえる。時代背景と考えが異なる現代の感覚で発言することは控えるほうがいいだろう。

a woman が女性一般をいうと同時にサン=ランス夫人個人をも指している。大きく女性一般に広げてその中に夫人を混ぜ込んだ。その伝でいけば『ライル卿の娘』で他人になりすましたリタも「女にとっての誘惑」に負けたということになる。

もう1カ所はつぎのとおり。サン=ランス夫人が嘘をついた動機についてベルは考えながらとつとつと説明した。

“It was a woman's temptation,” said Belle, musingly. p.384

「それは女にとっての誘惑でしたわ」とベルは考えながら言った。

美儂微笑道。這是婦女従来の淺見。所以一遇着利慾関頭。便很難打破了。第24回 200頁

ベルは微笑んでいった。それは女の昔からの浅はかな考えでした。ですから利欲の分かれ目に偶然出会うそれを打ち破るのはむづかしいことだったのです。

先に示したアーンコート卿のことと同じだ。こちらは女性の立場からの発言である。

フランス没落貴族のサン=ランス夫人は嘘についてでもイギリス貴族のもとに娘を送り込みたかった。娘のレーヌに裕福贅沢で幸福生活をさせたかった。そういう状況をどうあっても入手したいという誘惑に勝てなかった。それが夫人にとっての「女の誘惑」だ。だからこそそれを小説の題名にした。

原作はほかでもないサン=ランス夫人が金銭的な欲望に「誘惑」された経過とその結果を描いている。陳梅卿はベルの台詞から原文の temptation (誘惑) を外した。また「婦女従来の(女の昔からの)」と書いて女性一般のことだと解釈している。それで間違っていない。

参考までにあげる。ブレイム原作で a woman を使用するほかの作品には次のものがある [Law12]。

A WOMAN'S ERROR! A SERIAL STORY
IN TWO PARTS, 1872-73

A WOMAN'S WAR, 1876

WEAKER THAN A WOMAN, 1878

上記の3篇と合わせて合計4篇はブレイム作全223篇 [Law12] のなかでは目立たないくらいの数だ。少ないがあることはあるから珍しいと

はいえない。ついでだから *temptation* を題名に使用した例もあげる。2件ある[Law12]。以下のとおり。

HELEN'S TEMPTATION, 1869

A FATAL TEMPTATION, 1883

以上はあくまでも参考である。

漢訳題名は原作の『女の誘惑』とは違って『紅涙影』とする。「紅涙」を絞るとは若い女性が涙を流すこと。「影」はその姿である。泣きぬれる女性を象徴にして作品全体を緩く包んだ。訳者の嶺南息影廬主(陳梅卿)は一般的な「女の悲しみ」という方向に持っていきかけたようだ。そのことをこの漢訳題名からうかがうことができる。もうひとつ『紅涙影』の別名は「外国紅樓夢」という。『紅涙影』は『紅樓夢』に通音するから連想効果も狙っていた。罍

【参考文献】

ほぼ発表年順(同一著者のばあいはまとめた。引用していない文献もある)

[呉宓1]呉宓著、呉学昭整理注釈『呉宓日記』第1冊(1910-1915) 北京・生活・読書・新知三聯書店1998.3

[飯塚05]飯塚容「文明戯の映画化について」『現代中国文化の軌跡』中央大学出版部2005.3.31 中央大学人文科学研究所研究叢書36

[飯塚08]飯塚容「もうひとつの『姉妹花』——『ドラ・ソーン(谷間の姫百合)』の変容」『中央大学文学部紀要』通号219号2008.2

[飯塚09]飯塚容「もうひとつの『姉妹花』——『ドラ・ソーン(谷間の姫百合)』の変容」飯塚容・瀬戸宏・平林宣和・松浦恆雄編著『文明戯研究の現在——春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』東方書店2009.2.27

[飯塚14]飯塚容「第六章『谷間の姫百合』『乳姉妹』の変容——もう一つの『姉妹花』」『中国の「新劇」と日本——「文明戯」の研究』中央大学出版部2014.8.1。注:2009年論文に潘少瑜論文などを加筆したもの。

[宏淑12]陳宏淑「明治与晚清翻訳小説的訳者意識:以

菊池幽芳与包天笑為例」『中国文哲研究通訊』第22卷第1期 中国翻訳史專輯(上) 2012.3 電字版

[少瑜12]潘少瑜「維多利亞《紅樓夢》:晚清翻訳小説《紅涙影》の文学系譜与文化訳写」『台大中文學報』第39期 2012.12 電字版

[Law12]Graham Law, Gregory Drozd, Debby McNally, *Charlotte M. Bræme (1836-1884). Victorian Fiction Research Guide* 36[Version 1.1 (May 2012)]

[楊鄒18]楊文瑜、鄒波「中国における『ドラ・ソーン』の受容——演劇・メディアを中心に」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第21輯、福岡:東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2018.3.31

[鄒18]鄒波「東アジアにおける『ドラ・ソーン』の翻訳と翻案——小説の翻訳を中心に」香港日本語研究会『日本学刊』第21号 2018.8 電字版

[張治20]張治「評<<説部叢書>叙録>:電子書截成就的文献学創新」『上海書評』『澎湃新聞』2020.1.16 電字版

清末小説から

野間信幸氏より資料をいただきました。感謝します。

大塚豊子、山田みよ子、磯貝多恵子○(柳川春葉) 一生涯、二著作年表、二[三]業績 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書第18巻』昭和女子大学光葉会1962.3.1

加藤百合○明治初期露文学翻訳論攷(三)——重訳に対する二つの態度 つくば国際大学『研究紀要』第3号 1997.3.25

劉健芝○恐惧、暴力、家庭、女人 『読書』1999年 第3期 1999.3.10

藤元直樹○英国作家ジュール・ヴェルヌ——明治期翻訳のねじれ 『水声通信』第27号2008年 11/12合併号 2008.12.20

李玉宝、陳金林、劉永文○林紓抄本小説《明時演義》考述 『北京社会科学』2012年第4期 2012.8.15

鄒 振環○二十世紀中国翻訳史研究的起承転合(下) 「前沿聚焦」『南園學術』2015年第2期

曹 樹鈞○【書評】中国莎士比亚接受史縱横論——兼論瀬戸宏教授の《莎士比亚在中国》

『漢語言文学研究』2017年第2期 2017.6.15
 孫 艷娜○論文明戲对莎士比亞的文化轉訳 『国外文学』2019年第1期(総第153期) 2019.2.25
 潘少瑜著、石田卓生訳○知識の旅——近代科学小説の中の宇宙旅行 愛知大学現代中国学会編 『中国21』第50号 2019.3.25
 池田浩士○『人耶鬼耶』その謎と人物たち 黒岩涙香 『(裁判小説)人耶鬼耶』インパクト出版会 2016.4.15
 段 書曉○新しい英雄の誕生——科学小説から見る清末中国における想像力の変容 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』65、2020.3.15
 何 敏○『晚清至五四文学翻訳与民俗形象构建』北京・九州出版社2020.4
 張 邦彦○『精神的複調：近代中国的催眠術与大衆科学』台湾・聯経出版事業股份有限公司2020.4
 林紆訳述、張治編 ○『林訳小説精選十種』北京・商務印書館2020.6
 張 治○(『林訳小説精選十種』)解説 林紆訳述、張治編 北京・商務印書館2020.6
 姚 一鳴○【書評】一百年前的暢銷小説(付建舟『商務印書館<説部叢書>叙録』ウェブサイト『南方都市报』2020.6.21
 (美)魏愛蓮(ELLEN WIDMER)著、陳暢訳 ○『小説之家：詹熙、詹埜兄弟与晚清新女性』北京・社会科学文献出版社・歴史学出版社2020.7
 陶 磊○文化趣向与“五四”新文学訳者“直訳”主張的形成 『中国現代文学研究叢刊』2020年第7期(総第252期) 2020.7.15
 (美)葉凱蒂(CATHERINE YEH)、楊可訳 ○『晚清政治小説：一種世界性文学類型的遷移』北京・生活・読書・新知三聯書店 2020.8
 樂 梅健○相思寸寸灰——再論《玉梨魂》の文学史属性 『中国現代文学研究叢刊』2020年第8期(総第253期) 2020.8.15
 崔 文東○翻訳国民性：以晚清《魯濱孫飄流統記》中訳本為例 『中国翻訳』2010年第5期 2010.9.15
 —— ○青年魯迅与徳語“世界文学”——《域外

小説集》材源考 『文学評論』2020年第6期 2020.11 電字版

陸建徳『海潮大声起木鐸——陸建徳談晚清人物』

上海・東方出版中心2017.11

海潮大声起木鐸——再談林紆の訳述与漸進思想文化交流中“二三流者”の非凡意義——略説林紆訳小説中の通俗作品

再説《荊生》、兼及運動之術

不妨略剖壳文錢——“企業家”林紆与慈善事業

“周道如砥，其直如矢”？——護国戦争前後嚴復与梁啓超の“対話”

附録：陸建徳談民国初年の国家治理

『新文学史料』2020年第2期(総第167期)

2020.5.22

《青年進歩》刊程小青漢訳小説考論 ……翟 猛
 喻血輪の《綺情楼雜記》 ……眉 睫

『明清小説研究』2020年第3期(総第137期)

2020.7.15

從近代市民心理覚醒看晚清小説轉變 ……王博施
 女子学堂教育背景与近代女性小説創作 ……魯 毅
 論嶺南女作家黄翠凝の啓蒙想像与性別書写——以《姊妹花》和《奮回頭》為例 ……白薇、王進駒

『書論』第46号

2020.10.10

特集 二王学の試み・長尾雨山とその交友

長尾雨山青壮年期の詩論と詩作——初步的考察(1)

……柴田清繼

長尾雨山と徐園集

……松村茂樹

長尾雨山と鄭孝胥

……吳 孟晋

【資料採録】能田婉子『歌集一茎九花蘭』「あとがき」

(1)

……杉村邦彦編

三野二山の生涯と長尾雨山・大西見山との交友(2)

……田淵元博

『書論』第45号「特集・長尾雨山」を読む……田淵

元博、太田剛、柴田清繼、林淳、大工原美智子、田山泰三、松村茂樹、今西智久、成田健太郎、松本丘、福永昭、細谷正吉